

Ⅲ. 国際協力プログラム

1. 設置の趣旨と教育の目的

SDGs（持続可能な開発目標）に掲げられた目標からもわかるように、現在、人類の抱えるもっとも深刻な問題の1つは、アジア、中東、アフリカ、中南米諸国等の途上諸国に広く見られる貧困問題です。地球上の多くの人々が、依然として貧困に喘ぎ、教育、保健・衛生・医療、食料・栄養、環境、雇用、平和、人権といったさまざまな面で、基本的なニーズを満たすことができない状態にあります。

途上国の経済社会が、この厳しい貧困の悪循環から抜け出して、持続的な発展の軌道に乗るためには、そこに住んでいる人々自身による開発努力が不可欠です。競争市場の中で民間部門の産業や企業が発展し、付加価値や雇用を創出していくとともに、経済や社会のさまざまな領域で政府が適切な役割を果たしていくことが求められています。市場と政府それぞれの利点をうまく活用する一方、双方の不完全な部分を制度や組織で補完・代替し、途上国は長い時間をかけて、継続的に、自らの力で開発に取り組んでいく必要があります。

同時に、貧困問題の解決には、南北間の国際協力も不可欠な条件になっています。豊かな先進国が、途上国と緊密に協力しながら、資金面、技術面、人材面、貿易面、情報面等の幅広い分野で、積極的に開発問題に関与していかなければ、貧困問題の根本的な解決は極めて困難と考えられます。先進国政府による国際協力、国連等国際機関による国際協力、NGOsなど市民社会による国際協力、さらに、民間企業による資金や技術の移転、貧困層向けBOPビジネス、ソーシャルビジネスを通じての国際協力などが、途上国の経済社会の発展に寄与しています。

国際協力の諸活動を支え主導しているのは、開発問題に関連するさまざまな分野で優れた専門能力をもつ人材です。すなわち、途上国の経済・社会を分析することのできる高度な専門的知識・技術、柔軟な異文化理解・異文化適応能力、高度な語学力による国際コミュニケーション能力などが、国際協力に携わる人材にとって必要不可欠な個人的資質・能力であるといえます。複雑な経済・社会の構造を的確に分析し、さまざまな困難な環境の中で、途上国が進むべき方向を見極め、それに合った開発政策や開発戦略を考えることのできる、たくましい精神力と高度な専門能力をもった人材こそが、貧困という人類的な課題を解決するために求められているのです。

「国際協力プログラム」は、貧困問題の解決という、人類的課題に挑戦する人材を養成する場として設定されました。複数の学部配置されている、国際協力、途上国開発に関連したさまざまな専門科目の学修を中心に、国際的なコミュニケーション能力の強化も進めています。

さらに、本プログラム独自に開講する演習科目の履修を通じて、さまざまな学部の担当教員と、そしてさまざまな学部の学生と緊密に協力しながら、学部横断的な、学際的な視点から開発問題の専門的な研究を行い、総合的かつ体系的な能力を育成していくことを目標としています。特に、途上国社会に密着した現地感覚と鋭い問題意識を深めるよう、アジア途上諸国などでの現地調査（「Project-Based Field Work」）を実施し、その結果に基づいて調査報告書を執筆するという実践的な教育を重視しています。

2. 2023 年度演習科目担当者および履修者数

連番	氏名	所属学部	FLP 演習A	FLP 演習B	FLP 演習C	総計	実施形態
1	中川 康弘	経済	5	2	5	12	合併(A・B・C)
2	林 光洋	経済	7	3	3	13	単独(A・B・C)
3	平澤 敦	商	6	7	9	22	単独(A・B・C)
4	新原 道言	文	5	4	2	11	合併(A・B) 単独(C)
5	山田 恭総	国際経営	3	－	4	7	合併(A・C)
6	伊藤 晋	全学連携 教育機構	－	－	7	7	単独(C)
7	小澤 勝彦	全学連携 教育機構	－	4	2	6	前期：合併(B・C) 後期：単独(B・C)
8	花谷 厚	全学連携 教育機構	4	10	5	19	単独(A) 合併(B・C)
合 計			30	30	37	97	

3. プログラムスケジュール

- 5 月 第 1 回部門授業担当者委員会
- 6 月 第 2 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
- 7 月 第 3 回部門授業担当者委員会
ガイダンス（一年次生向け）
- 9 月 第 4 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
第 5 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
- 10 月 国際協力プログラム説明会（一年次生向け）
- 11 月 2024 年度募集に伴う選考試験
第 6 回部門授業担当者委員会
- 12 月 第 7 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
学内活動（期末成果報告会）
- 3 月 第 8 回部門授業担当者委員会（持ち回り開催）
FLP 修了発表
FLP 修了証書授与

4. プログラムの活動

期末成果報告会

- (1) 実施日：2023 年 12 月 9 日(土)
- 実施場所：中央大学 多摩キャンパス 3453 教室、3454 教室、3455 教室
- 実施内容：各ゼミによる年度活動報告

(2) 実施日：2023年12月9日(土)

実施内容：特別講演

テーマ：ビジネスの軸を23.4°傾ける仕事—SDGsと企業の同行—

講演者：坂本 雛梨氏(株式会社オルタナ)

5. これまでの履修生の主な就職・進学先実績

国際協力機構(JICA)、日本国際協力センター(JICE)、海外産業人材育成協会(HIDA)、国立青少年教育振興機構、日本貿易保険、伊藤忠商事、豊田通商、日本郵船、日本航空(JAL)、全日本空輸(ANA)、ANA テレマート、シンガポール航空、エバー航空、東日本旅客鉄道、東海旅客鉄道、山九、JTB、エイチ・アイ・エス、三菱東京UFJ銀行、三菱UFJ信託銀行、三井住友銀行、みずほフィナンシャルグループ、りそなホールディングス、横浜銀行、千葉銀行、ゆうちょ銀行、信金中央金庫、東邦銀行、多摩信用金庫、三井住友信託銀行、日本政策金融公庫、大和証券グループ本社、大和証券、岡三証券、第一三共、IHI、カカクコム、キヤノン(Canon)、トヨタ自動車、日産自動車、スズキ、クボタ、NEC、日本IBM、シスコシステムズ、太平電業、日立製作所、デンソー、ブリヂストン、ダイキン工業、千代田化工建設、清水建設、本田技研工業、京セラ、矢崎総業、三井物産、大王製紙、大日本印刷、中外製薬、デンカ、船井総合研究所、アビームコンサルティング、KPMG コンサルティング、PwC コンサルティング、フロンティア・マネジメント、エル・ティー・エス、ビジョン・コンサルティング、NJS、ビジョナル、楽天、日本ハム、三菱食品、長瀬産業、国分グループ本社、セブン-イレブン・ジャパン、マザーハウス、LIXIL、システナ、ユニリーバ・ジャパン、損害保険ジャパン、東邦瓦斯、INPEX、日本放送協会(NHK)、テレビ信州、テレビ熊本、日本経済新聞社、北海道新聞社、コナミデジタルエンタテインメント、KDDI、NTT データ、TIS、フリー(freee)、伊藤忠テクノソリューションズ、ソフトバンク、セコム、ファーストリテイリング、マイナビワークス、パーソルキャリア、CHINTAI、イオンモール、オリエンタルランド、AIU 高校生国際交流プログラム事務局、日本赤十字社、上組、郵船ロジスティクス、東京都医学総合研究所、国家・地方公務員(会計検査院、外務省、経済産業省、厚生労働省、国土交通省、財務省、内閣官房、都庁、県庁、市役所など)、東京大学(大学院農学生命科学研究科、新領域創成科学研究科)、一橋大学国際・公共政策大学院、一橋大学大学院社会学研究科総合社会学研究科、名古屋大学大学院国際協力研究科、大阪大学大学院高等司法研究科、慶應義塾大学法科大学院、早稲田大学大学院法務研究科、神戸大学大学院国際協力研究科、エジンバラ大学大学院、サセックス大学大学院(開発学研究科、国際教育センター)、ロンドン大学大学院東洋アフリカ研究学院、イーストアングリア大学大学院国際開発学研究科、ブラッドフォード大学大学院平和学研究科、ジュネーブ国際・開発研究大学院、中央大学大学院(経済学研究科、商学研究科、文学研究科、総合政策研究科、公共政策研究科)など

6. 演習教育活動

(1) 中川 康弘(経済学部・教授)

FLP演習A・B・C

<テーマ>

【A生】支援という行為を省察する

【B生】支援の営みを言語化する

【C生】「共に生きる」を社会実装する

<授業の概要>

【A生】

2021年度の国際交流基金調べで海外の日本語学習者数は141の国・地域で約379万人となり、国内でも留学生、技能実習生、移動する子供たちと多様化している。これまで「外国人に日本語を教えること」と漠然と見られてきた日本語教育は、母語/非母語話者の社会関係、障害やジェンダー学、アイデンティティの承認や権力といった政治性も射程に入れた領域に広がりを見せるに至った。そこで演習Aでは国際協力に内在する、ことばや文化の教育を軸にした人と人の水平的な関係、交流の側面に着目し、文献購読、見学調査等を通じてその理解、涵養を目指す。

【B生】

ことばの教育の観点から国際協力の意味を学んできた演習Aを経て、演習Bでは文献講読とフィールドワークを行い、国際協力と多文化共生について多角的に捉えていく。

前期は、指定文献や見学調査、後期はタイの大学での共同調査等を通じて、各自が設定したテーマの調査を軸に行い、成果報告を経て、学問的課題に応える論文にまとめる。

【C生】

異質な言語と教育実践に触れ、そこに関わる具体的な他者との出会いの原体験が、国際理解の契機となって地球規模の諸問題の解決につながるという確信を得た演習A、Bを経て、いよいよ演習Cの本授業において各自のテーマを理論化の俎上にまで高めていく。

前期は、指定文献を中心に輪読、ディスカッションを行い、後期はタイの大学での共同調査等により各自が設定したテーマの調査を軸に行い、国際協力、日本語教育の役割を考える。そして、年度末に卒業論文をまとめる。

<活動内容>

前期は、指定文献『教育と他者』（橋本憲幸著：春風社）を中心に輪読、ディスカッションを行い、国際協力、教育の観点から「支援」という営みへの理解を深める。並行して学外での見学調査や、ゲストスピーカーセッションも精力的に行い、現場の実情を体感する。座学と議論、そして現場を往還する知的作業を通じて、各自の興味を掘り起こしていく。

後期はタイの大学等で日本語を学ぶ現地学生との共同調査、日本の援助機関の訪問等により、各自が設定したテーマの調査を軸に行う。そして年度末に成果報告を経て、学問的課題に応える論文にまとめる。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B

実施日：2023年6月1日(木)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：東京都庁第一本庁舎 総務局人権部人権施策推進課

実施内容：11月に東京都の主催で開催されるダイバーシティ・プレゼンコンテストの打合せ

成果：明治、法政、東京都立、東京女子との間で行われるコンテストの概要を共有し、内容についてのイメージを固めた(ゼミ長：新村綾菜・河村歩瑠の2名が出席)。

対象演習：A・B・C

実施日：2023年6月2日(金)

講演者：岩岡 由季子 氏（認定特定非営利活動法人 開発教育協会（DEAR））

演 題：私たちの日常と国際協力の関係

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 7601 教室

実施内容：ファッションから考える環境・人権・貧困

成 果：ワークショップ形式で、主にファストファッションの製造、販売、流通、消費に至る過程で現れる国際協力の諸課題について、理解を深めることができた。
当日の成果を本学 HP に掲載された学生による報告を以下に記す。

<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2023/06/66317/>

2023年6月2日（金）、中川弘ゼミでは、開発教育協会（DEAR）の岩岡由季子さんと進藤さんをゲストに招き、ワークショップを体験しました。

同協会は、開発協力をめぐる諸問題を理解し、共に生きることのできる公正な地域社会づくりの実現を目的として活動している認定NPO法人です。

当日は、ファッションをテーマに、身近な洋服にまつわる環境、人権、貧困等の問題についての理解を深めました。

後半は岩岡さんから活動の動機についてのお話も伺うこともでき、全体を通じて、私は、地球規模の諸課題には、自分の部屋のクローゼットの中など身近なところから見直すことが理解の根本につながり、よりよい社会の形成を可能にする第一歩になると確信しました。

いきなり大きな問題に立ち向かうのではなく、私たちの日々の生活様式を再考していくことの大切さを、これからのゼミの学びに活かしていきたいです。

執筆：文学部人文社会学科英語文学文化専攻2年 伊東星凜



中央列向かって一番右が岩岡由季子さん

対象演習：A・B・C

実施日：2023年6月30日(金)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：独立行政法人国際交流基金本部

実施内容：国際交流基金の事業紹介、および今日的課題についてのディスカッション

成 果：日本語・日本文化の海外発信を通じた国際協力を担っている独立行政法人国際交流基金の本部を訪れ、日本語教育事業部の職員の話から、事業の意義や今後の課題について理解を深めることができた。

当日の成果を本学 HP に掲載された学生による報告を以下に記す。

<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2023/07/66808/>

2023年6月30日（金）FLP国際協力中川弘ゼミでは、東京都新宿区四谷にある独立行政法人国際交流基金（The Japan Foundation）本部を訪問しました。

国際交流基金は、「日本の友人を増やし、世界との絆を育む」の趣旨のもと、国内や海外で人々に文化、言語、対話を通じた日本に対する理解を促す事業を展開しています。

今回の訪問では、まず、広報部の大野さんからの事業の概要説明があり、その後、中国事業に携わる金子さんから、中国での日本との交流事業や、日本語教師養成などの活動の説明を受けました。また、ロシアでの勤務経験がある高口さんのお話を通じて、戦時下のロシアとウクライナで日本語教育には何ができるのかを考えました。

私が印象に残ったのは、日本と政治的関係が不安定な国々との間でも、言語や文化を通じて水面下で手を携える関係を築いていくことの重要性です。「親日派より知日派を」という考えのもと、市民が相互に理解し合える国家関係の意義を再認識しました。

後半には先のお三方に広報部の阿部さんも加わり、私たちの質疑に応じてくださいました。気が付けば実に2時間も経過していたのですが、意見交換も含めてとても充実した見学調査となりました。今回の訪問を踏まえ、引き続き中川ゼミでの学びを深めていこうと思います。

報告：法学部法律学科2年 麓巣嘉信



調査見学後に職員の方々と

対象演習：A・B

実施日：2023年7月6日(木)

実施都市：東京都新宿区

実施場所：東京都庁第一本庁舎 総務局人権部人権施策推進課

実施内容：東京都主催ダイバーシティ・プレゼンコンテストの第2回打合せ

成果：当日の進行やプレゼンのルール、役割分担などを共有した
(ゼミ長：新村綾菜・河村歩瑠が参加)。

対象演習：A・B・C

実施日：2023年7月14日(金)

講演者：山川 智子 氏 (文教大学文学部外国語学科教授)

演題：CEFRにおける複言語主義の検討と、日本社会の受容の在り方について

実施施設：中央大学 多摩キャンパス 7601 教室

実施内容：CEFR の意義と目指すものの確認、共有およびディスカッション

成果：実用主義とは別の言語教育の意義について理解を深め、またドイツの移民政策にかかると言語教育の役割の話について学ぶことができた。

対象演習：A・B・C

実施日：2023年8月7日(月)～2023年8月9日(水)

実施都市：長野県長野市

実施場所：JICA 長野デスク

実施内容：青年海外協力隊の活動報告および長野県下での国際協力事業について

成果：ウガンダでの農業隊員を経て、現在長野県内で国際交流推進員を担っている木島史暁氏から、当時の生活や活動時の苦労とやりがいについて話を聞いた。多くのゼミ生にとっては未知である、日本と環境や言葉が異なる世界で暮らし、働き、関係を築くことの面白さや難しさを考えるきっかけになった。



長野県庁舎での木島史暁 JICA 国際協力推進員によるレクチャー

対象演習：A・B・C

実施日：2023年9月4日(月)～2023年9月9日(土)

実施都市：バンコク (タイ)

実施場所：タマサート大学ランシット校言語学部、国際交流基金バンコク日本文化センター

実施内容：タマサート大学日本語専攻の学生への調査、およびバンコク日本文化センター訪問

成果：タマサート大学日本語学科長スニーラット教授がコーディネートしている日本語クラスに参加した。各ゼミ生が研究テーマについて聞き取り、またタマサートの学生も自分たちの疑問を聞くという双方向の活動を行った。データ収集の意義はもちろん、現地のみで学んだ日本語能力の高さ、日本文化についての造

詣の深さに驚き、自身の言語学習を振り返る契機にもなった。
また別日にバンコク日本文化センターを訪問、松井優樹日本語事業部長、近藤麻衣子日本語教育専門家の話から日本語教育を通じた国際協力の意義について理解を深めることができた。



タマサート大学日本語クラスでの活動風景



聞き取り調査の中間報告を終えて
(二列目向かって左がスニーラット教授)



バンコク日本文化センターで（前列向かって左から二番目が近藤麻衣子専門家・
後列向かって一番右が松井優樹事業部長）

対象演習：A・B・C

実施日：2023年10月13日(金)

講演者：広瀬 浩二郎 氏（国立民族学博物館人類基礎理論研究部教授）

演 題：相互行為としてのコミュニケーション

実施施設：中央大学 多摩キャンパス GG603 教室

実施内容：社会モデルからコミュニケーションを考える

成 果：国立民族学博物館の広瀬浩二郎教授から、「見える／見えない」ということを超えた障害の社会モデルについての理解を深めることができた。また視覚依存が別の身体感覚、機能を後退させているということへの気づきも得ることができ、言語運用を含むコミュニケーションのあり方についての複眼思考の契機となった。

当日の成果を本学 HP に掲載された学生による報告を以下に記す。

<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2023/10/68319/>



広瀬浩二朗先生（後列向かって右から3人目）

2023年10月13日（金）FLP国際協力プログラム中川康弘ゼミでは、国立民族学博物館教授の広瀬浩二朗さんをゲストスピーカーに迎え、「この子らから世に光を」をテーマにお話をいただきました。

全員の研究者としても有名な広瀬さんですが、前半は自分史・盲人史とともに、障害者権利条約の策定過程での障害者の思いを示した「nothing about us without us」の意味の深さを私たちに教えてくださいました。日本語では、一般に「私たちのことを私たち抜きで決めないで」と訳されますが、広瀬さんは、それだと「私たちのことは私たちにしかわからない」ととられかねないことを指摘されました。そして、そうならないために、「usの幅を広げる」ことが大事だということも強調されました。

後半は、広瀬さんが盲学校時代の「触る授業」から得た「触覚」をテーマとする、「ユニバーサル・ミュージアム」の活動についてのお話をいただきました。広瀬さんは触覚観察に、3要素、すなわち「入」「流」「求」を取り入れ、見えている人も見えていない人も楽しめる「触る」展覧会の企画・運営に携わっています。また、近著である広瀬浩二朗・相良啓子（2023）『『よく見る人』と『よく聴く人』共生のためのコミュニケーション手法』（岩波ジュニア新書）に込めた思いもうかがうことができました。

私は広瀬さんのお話を聞き、自分の生活がいかに「視覚」に偏っているかを痛感したと同時に、日常で「触覚」に少しでも気を配ることで新しい世界に出会うことができる気がしました。

執筆：文学部人文社会学科心理学専攻2年 坂本優芽

対象演習：A

実施日：2023年10月18日（水）

実施都市：栃木県小山市

実施場所：株式会社きぼう国際外語学院

実施内容：技能実習生向け日本語教育施設へのフィールドワークおよび聞き取り調査

成果：同学院の日本語教育主任講師に話を聞き、技能実習生や企業が求めていること、日本語教育に何ができるのかについて包括的に理解することができた。また当日は技能実習生の声も直接聞くことができ、成果報告、論文執筆の参考になった。

（鷲巣嘉信による見学調査）

当日の成果を本学 HP に掲載された学生による報告を以下に記す。

<https://www.chuo-u.ac.jp/gp/collaborate/news/2023/12/69285/>

海外技能実習生日本語教育機関での見学調査で学んだこと

FLP国際協力プログラム中川康弘ゼミ所属の法学部2年鷲巣嘉信です。私は現在、技能実習生との多文化共生について日語学習の観点から研究しています。2023年10月18日、ゼミの個人研究の一環で、技能実習生向け日本語教育を行っている「株式会社きぼう国際外語学院」（栃木県小山市）を訪れました。そこで主任講師である栗又由利子さんにインタビューを行い、実習生と交流することができました。技能実習生は、来日後すぐ同校で1か月の日本語やマナー研修を受講し、修了後それぞれの受入企業へ向かいます。

2時間ほどのインタビュー調査で最も印象に残ったことは、受入企業が実習生の「地域の人や社会と関わりたい」という気持ちを汲み取れず、多文化共生の機会が失われているということです。主任講師の栗又さんは「お金をかけようせず、ただ労働力のみ求める実習生は結構ある」と指摘したうえで、実習生が地域交流のきっかけが作れるように会社の人がいっしょについて行くなどの企業努力が受入企業には求められているとおっしゃっていました。こうした企業努力は、在留期間中の転籍が可能になる今後の新制度において、人材確保のために重要になると感じました。

外国人の増加が確実視されている将来の日本社会に、多文化共生は不可欠です。今回の訪問で得た知見を、引き続き今後のゼミ活動に活かしていきたいと思います。

（法学部法律学科2年 鷲巣嘉信）



見学調査時、校舎前の写真

対象演習：A・B・C

実施日：2023年11月26日(日)

実施都市：東京都千代田区

実施場所：東京国際フォーラム

実施内容：東京都ダイバーシティ・プレゼンコンテストの参加

成果：ゼミ生有志でサブゼミを重ねてきた本選で、堂々と中川ゼミの論点と調査結果で得た考察内容を発表することができた。初参加ゆえ審査のポイントがつかめず、入賞には至らなかったが、コンテスト当日も含めて、学ぶことが多い行事だった。当日の成果を本学HPに掲載された学生による報告を以下に記す。

<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/student/2023/12/17546/>

FLP国際協カプログラム 中川康弘ゼミの学生が「東京都ダイバーシティ・プレゼンコンテスト」に出場

2023年12月21日



2023年11月26日(日)、多文化共生をテーマにしている都内5大学(明治大学・法政大学・東京立大学・東京女子大学・中央大学)のゼミによる、ダイバーシティ・プレゼンコンテストが、東京国際フォーラムで開催されました。東京都主催「ヒューマンライツ・フェスタ東京2023」の一環として行われたイベントに、FLP国際協カプログラム 中川康弘(経済学部 教授)ゼミからは、伊東星漢・河村歩瑠・坂本優芽・難波舞・新村綾菜(文学部)、齋藤嘉信(法学部)の6名が登場しました。

コンテストに出場した学生によるレポートをご紹介します。

コンテストは新しい学びの機会になりました

私たち中川ゼミは、日本語教育を起点に、多文化共生や異文化理解を社会的文脈で観点から考えているゼミです。今回は、普段のゼミとタイでのフィールド体験から学んだ、私たちが他のアジアに向けた無知や無関心のまなざし＝「アジアンオリエンタリズム」という概念を軸に、多文化共生の実現のための政策提言を行いました。学びをどうプレゼンテーションの型に落とし込むか、準備過程でそれぞれの考えをまとめる困難さにも遭遇しましたが、一丸となって議論を重ねていくことで、無事に本番を迎えることができました。

大会では、「アジアのこと どれだけ知っていますか? 歩み寄りから始まる多文化共生」というタイトルで、プレゼンテーションを行いました。惜しくも入賞はできなかったものの、東京都に一石を投じることはできたのではないかと思います。そして何より、協働で一つのものを作りあげていく新しい学びの機会を得て、一人ひとりが大きく成長することができました。

また、コンテスト当日に、他の参加大学のそれぞれオリジナリティあふれる発表を聞き、大きな刺激や新たな視点をいただくことができました。今回の学びを踏まえ、これからもますますゼミでの学びを深めていきたいと思っています。

(報告) 文学部英語文学文化専攻2年 伊東 星漢、文学部教育学専攻2年 河村 歩瑠

(2) 林 光洋 (経済学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学 (Development Economics) に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学 (Development Studies) の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

<活動内容>

2023年度は、新型コロナウイルス感染症の影響がほぼ消えた1年間になりました。コロナ前とほぼ同じ状態で、授業やそれ以外の活動に臨むことができました。

2023年度は、開発経済学(2冊)、社会開発、フェアトレードの分野のテキストを合計4冊使用して学習しました。過去2年にならい、2年次のグループ論文の準備を、それまでよりも前倒しにして前期末から始め、夏休みには研究の枠組み作りに本格的に取り組みました。4つの班に分かれて、「インドネシアにおけるごみ銀行の役割 ―住民の意識変化に焦点を当てて―」、「サブサハラ・アフリカ地域の住民参加型学校運営における学校運営委員会の影響」、「BOP ビジネスにおける小売モデルとD2Dモデルの役割 ―インド農村部での衛生商品販売を事例にして―」、「児童労働フリーゾーン制度が機能するための条件 ―インド、ガーナ、ウガンダの比較から―」という4編のグループ論文を執筆しました。対面およびオンラインで準備を重ね、12月開催のFLP国際協力プログラム期末成果報告会では、2年生論文の骨格にあたる部分を報告することができました。その論文も最終的には2月に完成し、刊行することができました。

さらに、下記の通り、4年生(演習C)の訪問授業を手伝ったり、ユニセフ・プロジェクトに参加したりしました。前述の通り、コロナ関連の制約もなくなり、過去3年間、まったく実施できなかった生協のフェアトレード・フェアを実施することができました。また、図書館(国際機関資料室)と「FACT×国際機関資料室 フェアトレード展(国連SDGs企画展)」という共同企画も初めて開催しました。その他、3年生(演習B)や4年生(演習C)が中心になって企画・準備し、実施した特別授業、セミナー、講演会等にも積極的に参加しました。

活動内容の一部については、最下段に記載したURLもご参照ください。

<訪問授業/模擬授業>

・ 訪問授業/模擬授業（自主的に実施）

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 7 月～11 月（下記「訪問先リスト」を参照）

実 施 場 所 : 高校 5 校および中学校 1 校（下記「訪問先リスト」を参照）

実施内容/成果: 4 年生（演習 C）が前年度に実施した研究プロジェクト（フィリピン）の結果を主な材料として使用しながら、途上国の開発や国際協力というテーマで高校生と中学生に対して参加型の授業/ワークショップを実施しました。本年度は附属 4 校とそれ以外 2 校の合計 6 校に対して、それらの高校生/中学生に対して、途上国の開発、国際協力の啓蒙・啓発を進め、関連する情報を提供することができました。同時に、ゼミ学生は、自身の知識を整理したり、情報の伝えかたを学習したりすることができました。主に、4 年生（演習 C）が中心になって訪問授業/模擬授業プロジェクトを準備・実行しましたが、2 年生（演習 A）も 4 年生に同行し、授業実施のポイントや難しさを知り、2025 年度に備えることができました。

訪問先リスト

訪問先	日時	対象学年	参加生徒数	授業方法
浦和学院高校	7月1日（土） 120分	高校1～3年生	33人	対面 (中央大学で実施)
東京純心女子高校	7月8日（土） 90分	高校1～3年生	8人	対面
中央大学 附属高校	10月11日（水） 50分	高校2年生	40人	対面
中央大学 杉並高校	10月25日（水） 50分	高校2年生	42人	対面
中央大学高校	10月26日（木） 110分	高校1年生	160人	対面
中央大学附属 横浜中学校	11月16日（木） 50分	中学2年生	171人	対面

<実態調査・見学調査・講演会>

1) 途上国のコロナワクチン格差について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 5 月 9 日(火)

講 演 者 : 若林 真美 氏（国立国際医療研究センター国際医療協力局グローバルヘルス政策研究センター）

演 題 : 途上国における COVID-19 ワクチン格差

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7508 教室

実施内容/成果: コロナ禍における途上国を意識したワクチンの国際的な供給・分配の枠組みについて説明をしてもらいました。途上国にコロナワクチンを公平に分配できなかった状況、その原因として輸送・保管のインフラ未整備、基本的な保健医療サービスの脆弱性、ワクチン忌避などについて学習することができました。

2) アフリカの農村開発プロジェクトについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 6 月 20 日(火)

講演者：石川 渚 氏、永石 諒 氏（株式会社 JIN）
演 題：国際協力の現場から ー北部ウガンダ生計向上プロジェクトー
実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7508 教室
実施内容/成果：首都カンパラのある南部に比べて、ウガンダ北部は 20 年以上続いた内戦のため、農業の知識、技術、経験の蓄積が少なく、貧困者の割合が多いこと、その改善のために北部ウガンダ生計向上プロジェクトが実施されているということを説明してもらいました。主に自家消費を目的としていた北部の農業を市場志向型農業に変えて現金収入を増やし、貧困の解消を目指すプロジェクトの内容、その成果、実施過程における課題、課題解決のための工夫などについて学習することができました。

3) 民間企業のフェアトレードについて学ぶ

対象演習：A・B・C
実施期間：2023 年 10 月 10 日(火)
講演者：小林 正忠 氏（楽天グループ株式会社）
演 題：楽天グループのフェアトレードへの取り組み
実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7101 教室
実施内容/成果：楽天が 2018 年に開設した「EARTH MALL with RAKUTEN」のサイトで行なっている SDGs、エコフレンドリー、地域活性化、持続可能な消費を意識したフェアトレードについて説明をしてもらいました。フェアトレード推進機関や NGOs ではなく、民間企業である楽天が、何を目指して、どのような組織体制で、フェアトレードに取り組んでいるのかについて具体的に学習することができました。

4) サブサハラ・アフリカの開発について学ぶ

対象演習：A・B・C
実施期間：2023 年 11 月 14 日(火)
講演者：戸川 正人 氏、中村 俊之 氏、乾 英二 氏（JICA）
演 題：アフリカの開発の現状と課題
実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7101 教室および 7508 教室
実施内容/成果：サブサハラ・アフリカ諸国の特徴や暮らし、経済・社会の現状、日本政府・JICA の対アフリカ援助戦略、TICAD（Tokyo International Conference on African Development）のこれまでの流れと今後の方針等について説明をもらいました。貧困や紛争だけではなく、統計データや写真などから、アフリカの経済発展の潜在能力の高さや将来性についても学習することができました。

5) ユニセフとの共同講演会を通じて途上国における児童労働について学ぶ

対象演習：A・B・C
実施期間：2023 年 11 月 21 日(火)
講演者：村山 晴香 氏（日本ユニセフ協会）、林ゼミ 4 年生
演 題：途上国の児童労働とウェストピッカー
実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7101 教室
実施内容/成果：日本ユニセフ協会と連携して、途上国の児童労働をテーマにした講演会を開催した。途上国の児童労働の削減・撲滅に関連した活動をユニセフはどのように行なっているのかについて、村山晴香氏から説明をもらいました。一方、林ゼミ 4 年生（演習 C）が、2022 年度に実施したフィリピンのウェストピッカーの現状や改善策に関する研究結果について報告しました。募金についても多摩センター駅前広場と立川駅前行ないました。

並行して、本年度もユニセフのオンライン募金システム（フレンドネーション）を活用しました。その結果、約 30 万円を集めることができ、これを途上国の子どもたちの教育支援のための活動に寄付することができました。

6) 青年海外協力隊（JICA 海外協力隊）の活動について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 12 月 5 日(火)

講 演 者 : 伊藤 学 氏 (ブルードットグリーン株式会社)、小平 直人 氏 (社団法人青年海外協力協会)

演 題 : JICA ボランティアセミナー 2023

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス GG701 教室

実施内容/成果: 教育分野(教育委員会に派遣)で青年海外協力隊(JICA 海外協力隊)の隊員としてガーナに滞在した林ゼミ OB の伊藤氏の活動内容や経験、青年海外協力隊(JICA 海外協力隊)になるために求められていること等について学習することができました。

7) 企業の SDGs を後押しする取り組みについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 12 月 9 日(土)

講 演 者 : 坂本 雛梨 氏 (株式会社オルタナ)

演 題 : ビジネスの軸を 23.4° 傾ける仕事 ―SDGs と企業の同行―

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 3551 教室

実施内容/成果: 期末成果報告会の特別講演会で、企業の SDGs を後押しする仕事を行なっているオルタナの坂本氏(林ゼミ OG)から、同社の取り組みの内容や日本企業がどこまで SDGs を意識しているのかについて説明してもらいました。同社が WEB/紙媒体の定期雑誌を発刊したり、SDGs 格付けセレクションをしたりしていること、日本企業は SDGs の進捗が一般的に遅れていること、中には「SDGs ウォッシュ」と呼ばれる見せかけの SDGs の取り組みをしている企業もあること等について学習することができました。

<参考 URL>

1) 訪問授業/模擬授業

<https://mhayashi.r.chuo-u.ac.jp/hp/2023-12-19-1652>

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/07/67050/>

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/10/68498/>

2) 特別授業(途上国のコロナワクチン格差)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/05/65994/>

3) 特別授業(アフリカの農村開発プロジェクト)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/06/66774/>

4) 特別授業(民間企業のフェアトレード)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/11/68594/>

5) 特別授業(サブサハラ・アフリカの開発)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/12/69136/>

6) JICA ボランティアセミナー(青年海外協力隊の活動)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/12/69339/>

<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2023/12/17493/>

<https://mhayashi.r.chuo-u.ac.jp/hp/2023-12-30-1650>

7) 特別授業(企業の SDGs を後押しする取り組み)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2024/01/69732/>

FLP演習B

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学（Development Economics）に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学（Development Studies）の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

<活動内容>

2023年度は、新型コロナウイルス感染症の影響がほぼ消えた1年間になりました。コロナ前とほぼ同じ状態で、授業やそれ以外の活動に臨むことができました。

前期も後期も、3コマ連続する本ゼミ（メインのゼミ）とサブゼミの授業を行ないました。日本語のテキストとして『フィリピン—急成長する若き「大国」—』（井出穰治、2017年）、『なぜ貧しい国はなくならないのか—正しい開発戦略を考える—（第2版）』（大塚啓二郎、2020年）、『ドゥテルテ 強権大統領はいかに国を変えたか』（石山永一郎、2022年）を、英語のテキストとして *Overcoming Barriers to Women's Economic Empowerment in the Philippines* (World Bank, 2021年)、*Undernutrition in the Philippines: Scale, Scope, and Opportunities for Nutrition Policy and Programming* (Mbuya, Demombynes, Piza, and Adona, 2021年) を輪読し、知識を獲得するとともに、英語文献・資料の使用に慣れるように努めました。

林ゼミの中心的イベントであり、ほぼすべてのプロセス・作業を学生が行なう3年次1年間を使った研究プロジェクトも実施しました。2023年2月、キックオフの合宿を行なうことはかなわず、その代わりに大学のキャンパス内で3日間の集中討議を行ない、そこで研究対象国をフィリピンに、テーマを防災（コミュニティ防災）、農業・農村開発（アグロフォレストリー）、食料不安改善（フードバンク）に決めて、研究プロジェクトをスタートさせました。

奨学金を獲得することができ、研究計画書の作成やその他の準備もほぼスケジュール通りに進めることができました。オンラインを通じてフィリピン側にインタビュー調査や質問票調査を実施したり、日本国内の関係する組織・団体を訪ねたりしたうえで、コロナ前と同様、夏休み期間を利用して、2023年8月26日から9月9日までの14泊15日、フィリピンで3つの班に分かれて現地調査を行ないました。

現地調査終了後、経済学部のパレゼンテーション大会では、3つの班が出場し、2つの班が優勝しました。FLPの期末成果報告会でも、現地調査の結果を含む質の高い研究成果を発表

しました。最終的に、英語版および日本語版の論文（合計約 550 ページ）を刊行することができました、学部 3 年生の論文としては、質の高いものに仕上がりました。

活動内容の一部については、最下段に記載した URL もご参照ください。

<訪問授業/模擬授業>

・訪問授業/模擬授業（自主的に実施）

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 7 月から 11 月（下記「訪問先リスト」を参照）

実 施 場 所 : 高校 5 校および中学校 1 校（下記「訪問先リスト」を参照）

実施内容/成果: 4 年生（演習 C）が前年度に実施した研究プロジェクト（フィリピン）の結果を主な材料として使用しながら、途上国の開発や国際協力というテーマで高校生と中学生に対して参加型の授業/ワークショップを実施しました。本年度は附属 4 校とそれ以外 2 校の合計 6 校に対して、それらの高校生/中学生に対して、途上国の開発、国際協力の啓蒙・啓発を進め、関連する情報を提供することができました。同時に、ゼミ学生は、自身の知識を整理したり、情報の伝えかたを学習したりすることができました。主に、4 年生（演習 C）が中心になって訪問授業/模擬授業プロジェクトを準備・実行しましたが、3 年生（演習 B）も 4 年生に同行し、授業実施のポイントや難しさを知り、2024 年度に備えることができました。

訪問先リスト

訪問先	日時	対象学年	参加生徒数	授業方法
浦和学院高校	7月1日（土） 120分	高校1－3年生	33人	対面 (中央大学で実施)
東京純心女子高校	7月8日（土） 90分	高校1－3年生	8人	対面
中央大学 附属高校	10月11日（水） 50分	高校2年生	40人	対面
中央大学 杉並高校	10月25日（水） 50分	高校2年生	42人	対面
中央大学高校	10月26日（木） 110分	高校1年生	160人	対面
中央大学附属 横浜中学校	11月16日（木） 50分	中学2年生	171人	対面

<実態調査・見学調査・講演会>

1) 途上国のコロナワクチン格差について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 5 月 9 日(火)

講 演 者 : 若林 真美 氏（国立国際医療研究センター国際医療協力局グローバルヘルス政策研究センター）

演 題 : 途上国における COVID-19 ワクチン格差

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7508 教室

実施内容/成果: コロナ禍における途上国を意識したワクチンの国際的な供給・分配の枠組みについて説明をしてもらいました。途上国にコロナワクチンを公平に分配できなかった状況、その原因として輸送・保管のインフラ未整備、基本的な保健医療サービスの脆弱性、ワクチン忌避などについて学習すること

ができました。

2) アフリカの農村開発プロジェクトについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 6 月 20 日 (火)

講 演 者 : 石川 渚 氏、永石 諒 氏 (株式会社 JIN)

演 題 : 国際協力の現場から ―北部ウガンダ生計向上プロジェクト―

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7508 教室

実施内容/成果 : 首都カンパラのある南部に比べて、ウガンダ北部は 20 年以上続いた内戦のため、農業の知識、技術、経験の蓄積が少なく、貧困者の割合が多いこと、その改善のために北部ウガンダ生計向上プロジェクトが実施されているということを説明してもらいました。主に自家消費を目的としていた北部の農業を市場志向型農業に変えて現金収入を増やし、貧困の解消を目指すプロジェクトの内容、その成果、実施過程における課題、課題解決のための工夫などについて学習することができました。

3) 研究計画/研究内容の伝え方について学ぶ

対 象 演 習 : B

実 施 期 間 : 2023 年 8 月 1 日 (火)

講 演 者 : 前川 司 氏 (元アジア開発銀行)

演 題 : 海外での効果的なプレゼンテーションについて

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7508 教室

実施内容/成果 : 研究計画や研究内容をフィリピンを含む海外で英語を使って発表・報告する場合、日本で日本語を使う場合に比べて、どのような点に注意したらいいのか、どのようなテクニックが求められるのか、具体的に説明してもらいました。学生たちが研究計画書を発表し、その内容に加えて、プレゼンテーションの仕方について指導してもらいました。PPT の 1 ページに記載する情報量の制限、アイコンタクトやジェスチャーの重要性などについて学習することができました。

4) ビジネスから見たアグロフォレストリーについて学ぶ

対 象 演 習 : B

実 施 期 間 : 2023 年 8 月 18 日 (金)

実 施 都 市 : 東京都千代田区

実 施 場 所 : 株式会社 FRUTA FRUTA

実施内容/成果 : アグロフォレストリーの製品を取り扱う企業としての視点から、アグロフォレストリーの現状や今後について、実際に取り引きしているブラジルのコミュニティについて、さらに成功事例としてトメアス総合農業協同組合 (CAMTA) について説明してもらいました。成功すれば、アグロフォレストリーは環境も生活も守ることのできる魅力的なものだと再確認することができました。同時に、アグロフォレストリーの作物市場の拡大や農民のアグロフォレストリーの継続性に課題があることを学習しました。

5) 日本のフードバンクの役割および機能について学ぶ

対 象 演 習 : B

実 施 期 間 : 2023 年 8 月 21 日 (月)

実 施 都 市 : 愛知県名古屋

実 施 場 所 : 特定非営利活動法人セカンドハーベスト名古屋

実施内容/成果 : 日本の中でも活動規模の大きいセカンドハーベスト名古屋を訪ね、フード

バンクの仕組みについて調査を実施しました。セカンドハーベスト名古屋が行なっているフードバンク活動における情報共有と在庫管理の実情、同団体のステークホルダーである寄贈企業、受益団体とのつながり等について説明をしてもらいました。寄贈企業から寄贈された食料を品目別、賞味/消費期限別に視覚的にもわかりやすく仕分け（食料の仕分け作業）を行っていたこと、すべての品目の食料を求められる温度、環境下で保管（保管機能）していたことを学びました。受益団体からもセカンドハーベスト名古屋との情報共有が円滑に行なわれていることを聞くことができました。

6) 国内外のコミュニティ防災について学ぶ

対 象 演 習 : B

実 施 期 間 : 2023 年 8 月 22 日 (火)

実 施 都 市 : 東京都港区

実 施 場 所 : 日本赤十字社本社

実施内容/成果: 日本・海外におけるコミュニティ防災や外部組織と住民組織の連携、住民のオーナーシップの現状・課題、日本と海外の違い等を明らかにするために日本赤十字社本社を訪問しました。日本赤十字社がサポートしている代表的な海外事業の 1 つ、インドネシアでのコミュニティ防災支援事業について詳細な説明をしてもらいました。防災のトレーニングを行なう中で、コミュニティのオーナーシップが醸成されることを学びました。また、防災の訓練を行なう人々のモチベーションを高めることができるよう、若者にインセンティブを与えるとといった工夫が重要であることも学ぶことができました。国内の主要な事業の 1 つである「赤十字防災セミナー」についても説明してもらいました。阪神・淡路大震災で倒壊家屋から救助された人々のうち、消防、警察、自衛隊から救助された人は約 1.7%で、自力で避難した人（自助）、近隣の人に助けてもらった人（共助）が大半を占めていたということを教えてもらいました。全国の町内会や自治会で「赤十字防災セミナー」を開催し、近隣住民の人付き合いのきっかけ作りに努めていることを学びました。公助には限界があり、日本でも共助が重要であることを理解することができました。

7) フィリピンの社会的課題の解決について学ぶ

対 象 演 習 : B

実 施 期 間 : 2023 年 8 月 26 日 (土)～2023 年 9 月 9 日 (土)

実 施 都 市 : マニラおよびその周辺地域（フィリピン）

実 施 場 所 : JICA フィリピン事務所・他

実施内容/成果: フィリピンにおいて、3つの個別テーマ、a)「フィリピンにおけるコミュニティ防災－住民組織の観点から－」、b)「フィリピンのアグロフォレストリーの発展における地域コミュニティ組織/グループの役割－販路の確保、技術情報の取得・普及、投入材・共有設備の提供、組織内ガバナンスに焦点を当てて－」、c)「食料不安改善のためのフードバンクにおける情報共有と在庫管理－フィリピンと日本の事例分析」、それぞれをステークホルダー間の連携とコミュニティの役割という視点から調査し、フィリピンの社会的課題の現状とその解決に必要なことについて学習することができました。

8) ソーシャル・ビジネスによる貧困削減について学ぶ

対 象 演 習 : B

実施期間 : 2023 年 8 月 27 日(日)
講演者 : Mr.BJ Gotanci (First Ventures Corporation)
演 題 : フィリピンにおけるソーシャル・ビジネスの役割と限界
実施都市 : マニラ (フィリピン)
実施場所 : First Ventures Corporation 本社
実施内容/成果 : 貧困削減を目的としたソーシャル・ビジネスを行なっている First Ventures Corporation を訪ね、事業開始の経緯、事業内容、成果について講演してもらいました。低所得家庭でも購入可能な子供たち向けスクール文房具を販売する事業を行ない、一定程度役に立っている一方、最貧困層の家庭にまでは販売できていないという、ソーシャル・ビジネスの限界についても学習することができました。

9) COVID-19 パンデミックのフィリピン社会・経済への影響について学ぶ

対象演習 : B
実施期間 : 2023 年 8 月 29 日(火)
講演者 : Prof. Carlene PC Pilar-Arceo (University of the Philippines Diliman)
演 題 : フィリピンにおけるソーシャル・ビジネスの役割と限界
実施都市 : マニラ (フィリピン)
実施場所 : フィリピン大学ディリマン校
実施内容/成果 : COVID-19 パンデミックはフィリピンの社会・経済にどのような影響を与えたのかについて講演してもらいました。他の途上国と同様、フィリピンにおいても COVID-19 は、富裕層に比べて貧困層により深刻な負の影響を及ぼしたことを知ることができました。これは、フィリピン政府のセーフティネットの未整備や不適切な対応(汚職)によるところが大きいことも学ぶことができました。

10) 国内のコミュニティ防災について学ぶ

対象演習 : B
実施期間 : 2023 年 10 月 3 日(火)
実施都市 : 東京都新宿区
実施場所 : 日本赤十字社東京都支部
実施内容/成果 : 日本赤十字社東京都支部を訪ね、日本国内におけるコミュニティ防災の実際の支援事業を調査しました。東京都支部は、「日本赤十字社復興支援事業基本方針」にもとづいて、被災地のニーズに対応した支援、一般市民を対象とした防災セミナーや子どもたちを対象とした防災教育プログラム等の防災教育事業を実施していることを学びました。また、「赤十字防災セミナー」を地域や学校で主催していることも知ることができました。インタビューの中で、東京都は近隣住民との関係が希薄であることから、日本の中でも特にコミュニティでの防災活動が行なわれていないこと、それを克服するためには住民個人が積極性をもって自助の強化を進めることが重要であることを学ぶことができました。

11) 民間企業のフェアトレードについて学ぶ

対象演習 : A・B・C
実施期間 : 2023 年 10 月 10 日(火)
講演者 : 小林 正忠 氏 (楽天グループ株式会社)
演 題 : 楽天グループのフェアトレードへの取り組み
実施場所 : 中央大学 多摩キャンパス 7101 教室
実施内容/成果 : 楽天が 2018 年に開設した「EARTH MALL with RAKUTEN」のサイトで行なっ

ている SDGs、エコフレンドリー、地域活性化、持続可能な消費を意識したフェアトレードについて説明をしてもらいました。フェアトレード推進機関やNGOsではなく、民間企業である楽天が、何を指して、どのような組織体制で、フェアトレードに取り組んでいるのかについて具体的に学習することができました。

12) サブサハラ・アフリカの開発について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 11 月 14 日 (火)

講 演 者 : 戸川 正人 氏、中村 俊之 氏、乾 英二 氏 (独立行政法人国際協力機構(JICA))

演 題 : アフリカの開発の現状と課題

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7101 教室および 7508 教室

実施内容/成果 : サブサハラ・アフリカ諸国の特徴や暮らしぶり、経済・社会の現状、日本政府・JICA の対アフリカ援助戦略、TICAD (Tokyo International Conference on African Development) のこれまでの流れと今後の方針等について説明をしてもらいました。貧困や紛争だけではなく、統計データや写真などから、アフリカの経済発展の潜在能力の高さや将来性についても学習することができました。

13) ユニセフとの共同講演会を通じて途上国における児童労働について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 11 月 21 日 (火)

講 演 者 : 村山 晴香 氏 (日本ユニセフ協会)、林ゼミ 4 年生

演 題 : 途上国の児童労働とウェイトピッカー

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7101 教室

実施内容/成果 : 日本ユニセフ協会と連携して、途上国の児童労働をテーマにした講演会を開催した。途上国の児童労働の削減・撲滅に関連した活動をユニセフはどのように行なっているのかについて、村山晴香氏から説明をしてもらいました。一方、林ゼミ 4 年生 (演習 C) が、2022 年度に実施したフィリピンのウェイトピッカーの現状や改善策に関する研究結果について報告しました。募金についても多摩センター駅前広場と立川駅前でを行いました。並行して、本年度もユニセフのオンライン募金システム (フレンドネーション) を活用しました。その結果、約 30 万円を集めることができ、これを途上国の子どもたちの教育支援のための活動に寄付することができました。

14) 青年海外協力隊 (JICA 海外協力隊) の活動について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 12 月 5 日 (火)

講 演 者 : 伊藤 学 氏 (ブルードットグリーン株式会社)、小平 直人 氏 (社団法人青年海外協力協会)

演 題 : JICA ボランティアセミナー 2023

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス GG701 教室

実施内容/成果 : 教育分野 (教育委員会に派遣) で青年海外協力隊 (JICA 海外協力隊) の隊員としてガーナに滞在した林ゼミ 0B の伊藤氏の活動内容や経験、青年海外協力隊 (JICA 海外協力隊) になるために求められていること等について学習することができました。

15) 企業の SDGs を後押しする取り組みについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 12 月 9 日(土)

講 演 者 : 坂本 雛梨 氏 (株式会社オルタナ)

演 題 : ビジネスの軸を 23.4° 傾ける仕事 ―SDGs と企業の同行―

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 3551 教室

実施内容/成果: 期末成果報告会の特別講演会で、企業の SDGs を後押しする仕事を行なっているオルタナの坂本氏 (林ゼミ OG) から、同社の取り組みの内容や日本企業がどこまで SDGs を意識しているのかについて説明してもらいました。同社が WEB/紙媒体の定期雑誌を発刊したり、SDGs 格付けセレクションをしたりしていること、日本企業は SDGs の進捗が一般的に遅れていること、中には「SDGs ウォッシュ」と呼ばれる見せかけの SDGs の取り組みをしている企業もあること等について学習することができました。

<参考 URL>

1) 訪問授業/模擬授業

<https://mhayashi.r.chuo-u.ac.jp/hp/2023-12-19-1652>

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/07/67050/>

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/10/68498/>

2) 特別授業 (途上国のコロナワクチン格差)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/05/65994/>

3) 特別授業 (アフリカの農村開発プロジェクト)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/06/66774/>

4) 特別授業 (民間企業のフェアトレード)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/11/68594/>

5) 特別授業 (サブサハラ・アフリカの開発)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/12/69136/>

6) JICA ボランティアセミナー (青年海外協力隊の活動)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/12/69339/>

<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2023/12/17493/>

<https://mhayashi.r.chuo-u.ac.jp/hp/2023-12-30-1650>

7) 特別授業 (企業の SDGs を後押しする取り組み)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2024/01/69732/>

FLP演習C

<テーマ>

発展途上国の格差・貧困問題と経済・社会開発：学際的・現場重視型アプローチ

<授業の概要>

発展途上国の実態を把握し、開発の阻害要因あるいは促進要因を理解するためには、学問間の壁を乗り越えて考える柔軟な姿勢が必要であると同時に、拠って立つ基本的な考え方の枠組みを身につけることも重要です。また、開発分野は、他の分野以上に現場の感覚を併せ持つことが求められます。そこで、本演習は、開発経済学（Development Economics）に軸足を置きつつ、経済学だけでなく、政治学、法学、経営学、社会学、教育学、保健学、理学、工学、農学等の学問体系を学際的に駆使する開発学（Development Studies）の枠組みも借りながら、研究の対象を経済面に限定せず、教育、保健・医療、ジェンダー、環境等の社会・環境面へも広げ、幅広い分野の開発問題を扱っていきます。本演習は、3年間で下記の分野、項目を学ぶ一貫教育を目指しています。

- (1) 開発経済学：開発経済学の基礎と潮流
- (2) 格差と貧困：格差・貧困の現状・原因・削減策、経済成長・格差・貧困の関係、貧困とマイクロファイナンス
- (3) 産業開発と海外直接投資：農業開発、工業開発、経済発展と中小企業開発、貿易と海外直接投資、CSR、BOP ビジネス、ソーシャル・ビジネス、インクルーシブ・ビジネス
- (4) 社会開発：教育開発、保健・衛生・医療開発、人口問題、ジェンダー問題
- (5) 環境と開発：環境・資源・エネルギーと開発
- (6) アジア経済発展の経験：日本の経験、アジア発展途上国の経験、アジアの経験とアフリカ
- (7) 国際協力：ODA、国際開発機関、NGOs、民間企業の国際協力、MDGs/SDGs、フェアトレード

<活動内容>

2023年度は、新型コロナウイルス感染症の影響がほぼ消えた1年間になりました。コロナ前とほぼ同じ状態で、授業やそれ以外の活動に臨むことができました。

前期も後期も、連続コマの本ゼミ（メインのゼミ）とサブゼミの授業を行ないました。4年生（演習C）のメイン・タスクである卒業論文については、しっかりとした研究計画書の作成と幾度にもわたる論文の中間報告に時間を割きました。最終的に、メンバー全員が卒業（修了）論文を書きあげることができました。

卒業論文の執筆に加えて、先輩たちから受け継がれ、伝統になっている高校・中学校向けの訪問授業プロジェクトとユニセフとのジョイント・プロジェクトを、コロナ前と同じように実施することができました。また、その流れの中で、中大杉並高校から依頼があり、本年度、同校の探究授業の時間に実施したグローバル・プロジェクトのために、2023年4月から11月にかけて3回、ゼミ学生たちが高校生に対して授業をしたり、最終の成果発表の際に講評したりしました。

下記の通り、2023年6月から11月に、高校5校、中学校1校を対象にして、対面による訪問授業/模擬授業を自主的に実施し、ゼミ学生がこれまで学んだり、経験したりした途上国の開発、国際協力関連のことをより若い世代に伝えとともに、学生自身の知識の整理を行ないました。また、日本ユニセフ協会と連携して、10月から1月にかけて、共同講演会および募金活動を実施しました。

前年度までの活動で得た知識・経験や本年度の活動の結果を、訪問授業、ユニセフとの共同講演会、FLP国際協力プログラム期末成果報告会等の中で発表しました。

活動内容の一部については、最下段に記載したURLもご参照ください。

<訪問授業/模擬授業>

・訪問授業/模擬授業（自主的に実施）

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 7 月から 11 月（下記「訪問先リスト」を参照）

実 施 場 所 : 高校 5 校および中学校 1 校（下記「訪問先リスト」を参照）

実施内容/成果 : 4 年生（演習 C）が前年度に実施した研究プロジェクト（フィリピン）の結果を主な材料として使用しながら、途上国の開発や国際協力というテーマで高校生と中学生に対して参加型の授業/ワークショップを実施しました。本年度は附属 4 校とそれ以外 2 校の合計 6 校に対して、それらの高校生/中学生に対して、途上国の開発、国際協力の啓蒙・啓発を進め、関連する情報を提供することができました。同時に、ゼミ学生は、自身の知識を整理したり、情報の伝えかたを学習したりすることができました。

訪問先リスト

訪問先	日時	対象学年	参加生徒数	授業方法
浦和学院高校	7月1日（土） 120分	高校1～3年生	33人	対面 (中央大学で実施)
東京純心女子高校	7月8日（土） 90分	高校1～3年生	8人	対面
中央大学 附属高校	10月11日（水） 50分	高校2年生	40人	対面
中央大学 杉並高校	10月25日（水） 50分	高校2年生	42人	対面
中央大学高校	10月26日（木） 110分	高校1年生	160人	対面
中央大学附属 横浜中学校	11月16日（木） 50分	中学2年生	171人	対面

<実態調査・見学調査・講演会>

1) 途上国のコロナワクチン格差について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 5 月 9 日(火)

講 演 者 : 若林 真美 氏（国立国際医療研究センター国際医療協力局グローバルヘルス政策研究センター）

演 題 : 途上国における COVID-19 ワクチン格差

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7508 教室

実施内容/成果 : コロナ禍における途上国を意識したワクチンの国際的な供給・分配の枠組みについて説明をしてもらいました。途上国にコロナワクチンを公平に分配できなかった状況、その原因として輸送・保管のインフラ未整備、基本的な保健医療サービスの脆弱性、ワクチン忌避などについて学習することができました。

2) アフリカの農村開発プロジェクトについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 6 月 20 日(火)

講 演 者 : 石川 渚 氏、永石 諒 氏（株式会社 JIN）

演 題 : 国際協力の現場から ー北部ウガンダ生計向上プロジェクトー

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 7202 教室および 7508 教室

実施内容/成果：首都カンパラのある南部に比べて、ウガンダ北部は20年以上続いた内戦のため、農業の知識、技術、経験の蓄積が少なく、貧困者の割合が多いこと、その改善のために北部ウガンダ生計向上プロジェクトが実施されているということを説明してもらいました。主に自家消費を目的としていた北部の農業を市場志向型農業に変えて現金収入を増やし、貧困の解消を目指すプロジェクトの内容、その成果、実施過程における課題、課題解決のための工夫などについて学習することができました。

3) 民間企業のフェアトレードについて学ぶ

対象演習：A・B・C

実施期間：2023年10月10日(火)

講演者：小林 正忠氏(楽天グループ株式会社)

演題：楽天グループのフェアトレードへの取り組み

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7101 教室

実施内容/成果：楽天が2018年に開設した「EARTH MALL with RAKUTEN」のサイトで行なっているSDGs、エコフレンドリー、地域活性化、持続可能な消費を意識したフェアトレードについて説明をしてもらいました。フェアトレード推進機関やNGOsではなく、民間企業である楽天が、何を目指して、どのような組織体制で、フェアトレードに取り組んでいるのかについて具体的に学習することができました。

4) サブサハラ・アフリカの開発について学ぶ

対象演習：A・B・C

実施期間：2023年11月14日(火)

講演者：戸川 正人氏、中村 俊之氏、乾 英二氏(独立行政法人国際協力機構(JICA))

演題：アフリカの開発の現状と課題

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7101 教室および 7508 教室

実施内容/成果：サブサハラ・アフリカ諸国の特徴や暮らしぶり、経済・社会の現状、日本政府・JICAの対アフリカ援助戦略、TICAD(Tokyo International Conference on African Development)のこれまでの流れと今後の方針等について説明をもらいました。貧困や紛争だけではなく、統計データや写真などから、アフリカの経済発展の潜在能力の高さや将来性についても学習することができました。

5) ユニセフとの共同講演会を通じて途上国における児童労働について学ぶ

対象演習：A・B・C

実施期間：2023年11月21日(火)

講演者：村山 晴香氏(日本ユニセフ協会)、林ゼミ4年生

演題：途上国の児童労働とウェストピッカー

実施場所：中央大学 多摩キャンパス 7101 教室

実施内容/成果：日本ユニセフ協会と連携して、途上国の児童労働をテーマにした講演会を開催した。途上国の児童労働の削減・撲滅に関連した活動をユニセフはどのように行なっているのかについて、村山晴香氏から説明をもらいました。一方、林ゼミ4年生(演習C)が、2022年度に実施したフィリピンのウェストピッカーの現状や改善策に関する研究結果について報告しました。募金についても多摩センター駅前広場と立川駅前でな行ないました。並行して、本年度もユニセフのオンライン募金システム(フレンドネーション)を活用しました。その結果、約30万円を集めることができ、これ

を途上国の子どもたちの教育支援のための活動に寄付することができました。

6) 青年海外協力隊（JICA 海外協力隊）の活動について学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 12 月 5 日(火)

講 演 者 : 伊藤 学 氏 (ブルードットグリーン株式会社)、小平 直人 氏 (社団法人青年海外協力協会)

演 題 : JICA ボランティアセミナー 2023

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス GG701 教室

実施内容/成果 : 教育分野(教育委員会に派遣)で青年海外協力隊(JICA 海外協力隊)の隊員としてガーナに滞在した林ゼミ 0B の伊藤氏の活動内容や経験、青年海外協力隊(JICA 海外協力隊)になるために求められていること等について学習することができました。

7) 企業の SDGs を後押しする取り組みについて学ぶ

対 象 演 習 : A・B・C

実 施 期 間 : 2023 年 12 月 9 日(土)

講 演 者 : 坂本 雛梨 氏 (株式会社オルタナ)

演 題 : ビジネスの軸を 23.4° 傾ける仕事 ―SDGs と企業の同行―

実 施 場 所 : 中央大学 多摩キャンパス 3551 教室

実施内容/成果 : 期末成果報告会の特別講演会で、企業の SDGs を後押しする仕事を行なっているオルタナの坂本氏(林ゼミ 0G)から、同社の取り組みの内容や日本企業がどこまで SDGs を意識しているのかについて説明してもらいました。同社が WEB/紙媒体の定期雑誌を発刊したり、SDGs 格付けセレクションをしたりしていること、日本企業は SDGs の進捗が一般的に遅れていること、中には「SDGs ウォッシュ」と呼ばれる見せかけの SDGs の取り組みをしている企業もあること等について学習することができました。

<参考 URL>

1) 訪問授業/模擬授業

<https://mhayashi.r.chuo-u.ac.jp/hp/2023-12-19-1652>

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/07/67050/>

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/10/68498/>

2) 特別授業(途上国のコロナワクチン格差)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/05/65994/>

3) 特別授業(アフリカの農村開発プロジェクト)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/06/66774/>

4) 特別授業(民間企業のフェアトレード)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/11/68594/>

5) 特別授業(サブサハラ・アフリカの開発)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/12/69136/>

6) JICA ボランティアセミナー(青年海外協力隊の活動)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2023/12/69339/>

<https://globalization.chuo-u.ac.jp/report/action/2023/12/17493/>

<https://mhayashi.r.chuo-u.ac.jp/hp/2023-12-30-1650>

7) 特別授業(企業の SDGs を後押しする取り組み)

<https://www.chuo-u.ac.jp/academics/faculties/economics/news/2024/01/69732/>

(3) 平澤 敦 (商学部・教授)

FLP演習A

<テーマ>

企業・産業の国際比較～グローバル思考養成のために

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

2023年度の平澤敦ゼミAは、次のテーマでグループ研究を行った。

- 「タイにおけるGDPと農業従事者数の割合にGAPが生じているのはなぜなのか
―農協の強化に重点を置いて―」(佐々木愛実 相良圭祐)
 - 「タイにおける日本企業の持続的発展のために採るべき方策についての一考案
―自動車産業に着目して―」(鬼頭光 福田侑真 西脇水優花 Ahn Juhyeong)
- これらの研究成果は、期末成果報告会にて公表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2023年6月26日(月)～2023年6月27日(火)

実施都市：静岡県熱海市

実施場所：有限会社善波酒店

実施内容：全員グループの研究テーマ設定およびテーマに関するディスカッション
成 果：研究テーマの内容について共有することで研究論点が明確になった。

対象演習：A

実施日：2023年8月12日(土)～2023年8月16日(水)

実施都市：バンコク(タイ)

実施場所：JETROバンコク事務所・他

実施内容：タイの農業の実態、日本企業の展開などについてヒアリングおよび質疑応答
成 果：JETROにて、現地概況につきレクチャーを受けた後、質疑応答から得られたこと、および現地在住者にヒアリングしたことを、研究にフィードバックし、最終成果として取りまとめた。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年1月15日(月)

講演者：小山 睦浩氏 (mograph)

演 題：デザイン思考をプレゼンテーションにどう活用するか

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F502 教室

実施内容：デザインをするまでの思考プロセスにスポットをあてたレクチャー

成 果：グループごとに分かれて、オレンジワインという事例を用いてデザインを考えることで、デザイン思考のプロセスの基礎的理解を深めた。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年1月15日(月)

講演者：森 一起氏 (フリーランス)

演 題：人肌はAIを超えるか

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F502 教室

実施内容：AI と人との思考プロセスというものを踏まえ、商品についてのキャッチコピーを考えるうえでの言葉の使い方にスポットをあてたレクチャー

成 果：グループごとに分かれて、オレンジワインという事例を用いて、その商品を買う手に印象付けるための、キャッチコピーを考え、言葉の使い方についての理解を深めた。

FLP演習B

<テーマ>

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

2023年度のFLP平澤敦ゼミBは、2つのグループに分かれて、以下のテーマで研究を実施した。

- 「タイにおけるエコツーリズムの推進～日本との比較を中心として～」
(永井紀帆、榎本宗矩、村松優羽、西村英)
- 「タイ市場における日本食品企業の成長～食文化を通じたカルチャーの共生～」
(八子くりあ、本田良佳、瀬戸葉月)

これらの研究成果は、期末成果報告会にて公表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2023年6月26日(月)～2023年6月27日(火)

実施都市：静岡県熱海市

実施場所：有限会社善波酒店

実施内容：全員グループの研究テーマ設定およびテーマに関するディスカッション

成 果：研究テーマの内容について共有することで研究論点が明確になった。

対象演習：B

実施日：2023年8月31日(木)～2023年9月5日(火)

実施都市：バンコク(タイ)

実施場所：PTTメトロフォレストラーニングセンター・他

実施内容：タイにおける日本企業やツーリズムなどの現況

成 果：研究テーマに関する質疑応答を通じて、多角的な視点からのフィードバックが得られた。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年1月15日(月)

講演者：小山 睦浩氏(mograph)

演 題：デザイン思考をプレゼンテーションにどう活用するか

実施施設：中央大学 多摩キャンパスF502教室

実施内容：デザインをするまでの思考プロセスにスポットをあてたレクチャー

成 果：グループごとに分かれて、オレンジワインという事例を用いてデザインを考えることで、デザイン思考のプロセスの基礎的理解を深めた。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年1月15日(月)

講演者：森 一起氏(フリーランス)

演 題：人肌はAIを超えるか

実施施設：中央大学 多摩キャンパスF502教室

実施内容：AIと人との思考プロセスというものを踏まえ、商品についてのキャッチコピー

を考えるうえでの言葉の使い方にスポットをあてたレクチャー
成 果：グループごとに分かれて、オレンジワインという事例を用いて、その商品を買
い手に印象付けるための、キャッチコピーを考え、言葉の使い方についての理
解を深めた。

FLP演習C

<テーマ>

企業・産業の国際比較分析～ケーススタディを中心として

<授業の概要>

グループごとに研究テーマを設定し、研究に必要な基礎的知識をマスターし、基礎的知識の共有化をはかったうえで、グループ研究を進めていく。

毎回2グループが報告を行い、それに対するコメントおよびディスカッションを行う。

<活動内容>

2023年度のFLP平澤敦ゼミCは、MaaS(Mobility as a Service)というキーワード(大テーマ)をもとに、多角的なアプローチをするため、グループ(班)ごとに視点を各々定めてMaaSの研究を進めていった。調査先はMaaSの取り組みが進んでおり、先進事例も豊富なシンガポールとした。

「MaaSの日本への有効性について～シンガポールと日本の事例を比較して～」

経済班：由田彩美・仁平凜・小野澤美優

意識調査班：上野萌子・長屋帆乃・手塚咲来・中川七海・藤掛英介・塚崎真理奈

これらの研究成果は、期末成果報告会にて公表した。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2023年6月26日(月)～2023年6月27日(火)

実施都市：静岡県熱海市

実施場所：有限会社善波酒店

実施内容：全員グループの研究テーマ設定およびテーマに関するディスカッション

成 果：研究テーマの内容について共有することで研究論点が明確になった。

対象演習：C

実施日：2023年9月20日(水)～2023年9月25日(月)

実施都市：シンガポール

実施場所：JETROシンガポール・他

実施内容：シンガポールでのMaaSの実態、利用状況、ならびにスマートシティとの関連につきヒアリングならびに質疑応答を実施した。

成 果：MaaSの利用実態、アプリの普及度など、研究テーマを進化させる多くの示唆を得ることができた。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年1月15日(月)

講演者：小山 陸浩氏(mograph)

演 題：デザイン思考をプレゼンテーションにどう活用するか

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F502 教室

実施内容：デザインをするまでの思考プロセスにスポットをあてたレクチャー

成 果：グループごとに分かれて、オレンジワインという事例を用いてデザインを考えることで、デザイン思考のプロセスの基礎的理解を深めた。

対象演習：A・B・C

実施日：2024年1月15日(月)

講演者：森 一起氏(フリーランス)

演 題：人肌はAIを超えるか

実施施設：中央大学 多摩キャンパス F502 教室

実施内容：AI と人との思考プロセスというものを踏まえ、商品についてのキャッチコピーを考えるうえでの言葉の使い方にスポットをあてたレクチャー

成 果：グループごとに分かれて、オレンジワインという事例を用いて、その商品を買
い手に印象付けるための、キャッチコピーを考え、言葉の使い方についての理
解を深めた。

(4) 新原 道信 (文学部・教授)

F L P 演習 A・B

<テーマ>

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する惑星社会のフィールドワーク

<授業の概要>

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係（「国際協力」の根幹となるべき関係性）〉を創るのか？——いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手——〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さん、アフガニスタンで医療活動と人道支援に取り組んだ医師・中村哲さん、東南アジアを歩き人々のところに寄り添った鶴見良行さんなど——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや中村さん、鶴見さんのような方たちをお手本としつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきます。

- (1) 社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解します。
- (2) それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、異質で多様なひとたちと“ともに創ることを始める”ためのフィールドワークの方法を学んでいきます。私（新原）がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えします。
- (3) 国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査（フィールドワーク）にむけて準備をすすめていきます。ゼミ運営と海外実態調査の計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきます。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。

<活動内容>

新原ゼミの目標は水平的な関係の構築です。ゼミでの学びも水平的関係を意識し、フィールドワークでは学年をこえたチームを編成し、実際に見聞きしたことを分析するだけでなく、興味関心を仲間たちと共有することで、他者の本質を対等に理解することを目的としています。学生主体のゼミづくりも大きな特徴の一つで、ゼミのスケジュールや研究の対象もゼミ生同士で話し合うことで決定していききました。

台湾を2023年度のフィールドワーク地として定め調査及び準備を行ってきましたが、6月、7月頃になり台湾に実際に赴くことがやや困難であることが表面化しました。そのため進路を変え、目的地を台湾から浜松へと転換しました。ゼミでの学びの目的は場所ではなく、フィールドワークを学ぶこと、またその前後の学習であることに全体で合意しました。各ゼミ生の尽力により、限られた時間の中でもフィールドワークを実施しました。浜松ではABC生

合同の班に別れてのフィールドワークや、現地で活動している公益財団法人での聴き取り、遠州浜団地でのフィールドワーク、現地で生活されている日系ブラジル人の方たちとの交流など、非常に有意義な時間を過ごすことができた。後期には期末成果報告会があり、報告会に向けての準備やフィールドワークのまとめ等を行いました。期末成果報告会からの学びも含めて、最終報告書（総頁数 96 頁）をとりまとめました。

AB 生は、C 生や院生からのアドバイスにもとづき、来年度の台湾調査訪問を実現させるため、春休み期間の課題、現地へ行くための準備等を怠らずに進めています。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2023 年 9 月 1 日(金)～2023 年 9 月 2 日(土)

実施都市：静岡県浜松市

実施場所：浜松市多文化共生センター・他

実施内容：ABC 生合同の班を複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・かんがえ・ともにかく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ (composite community with heterogeneity)” の条件についての考察を深めた。

FLP演習C

<テーマ>

〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想する惑星社会のフィールドワーク

<授業の概要>

①異なる言語・文化・社会を生きるひとたちとの間で、いかにして〈水平的な人間関係（「国際協力」の根幹となるべき関係性）〉を創るのか？——いま私たちが直面する問題のほとんどは、地球規模となったグローバル社会の問題と結びついています。国際／国内と分けられないような惑星社会の問題に対して、どのような応答を試みたらよいのでしょうか。いまは亡きイタリアの社会学者メルッチは、「地政学的なブロックの間に依然として残っている亀裂、北と南との間のほとんど連結不可能なほどの裂け目、剥奪された人びとの間で鬱積している怒りの凄まじさ」を認めつつも、「存在しているものは何であれ、ただ存在するという理由のみによって静かに尊重されるようなテリトリー」を創ることに生涯を捧げました。新原ゼミは、この新たな社会構想の担い手——〈ひとのつながりの新たなかたち〉を構想していくひと、たとえば、難民高等弁務官として尽力された緒方貞子さん、アフガニスタンで医療活動と人道支援に取り組んだ医師・中村哲さん、東南アジアを歩き人々のところに寄り添った鶴見良行さんなど——の育成を目的としています。

②ゼミ生は、緒方さんや中村さん、鶴見さんのような方たちをお手本としつつ、“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／出会うべきひとに出会い、他者とともに場を創る力）”を蓄えていきます。

- (1) 社会学的な地域社会研究を学びつつ、惑星社会の様々な場で起こっている開発・発展をめぐる問題が、私たちの身近な暮らしとどう関わっているのかを理解します。
- (2) それと同時に、〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・ともに考え・かく〉力、“たったひとりで異郷／異教／異境の地に降り立ち”、異質で多様なひとたちと“ともに創ることを始める”ためのフィールドワークの方法を学んでいきます。私（新原）がこれまで行ってきた、イタリア・地中海・大西洋、ヨーロッパ・南米、アジア・太平洋などでの、最新のフィールドワークと国際的な協業の成果を学生のみなさんにお伝えします。
- (3) 国内外の諸地域で地域社会研究とフィールドワークを行い、コミュニティ形成の実際のプロジェクトに参加し、海外実態調査（フィールドワーク）にむけて準備をすすめていきます。ゼミ運営と海外実態調査の計画立案・実施も含めてゼミ生主導で実行していきます。とりわけゼミの途中での留学や長期の海外フィールドワークにチャレンジする学生を応援しています。

<活動内容>

新原ゼミの目標は水平的な関係の構築です。ゼミでの学びも水平的関係を意識し、フィールドワークでは学年をこえたチームを編成し、実際に見聞きしたことを分析するだけでなく、興味関心を仲間たちと共有することで、他者の本質を対等に理解することを目的としています。学生主体のゼミづくりも大きな特徴の一つで、ゼミのスケジュールや研究の対象もゼミ生同士で話し合うことで決定していききました。

台湾を2023年度のフィールドワーク地として定め調査及び準備を行ってきたが、6月、7月頃になり台湾に実際に赴くことがやや困難であることが表面化しました。そのため進路を変え、目的地を台湾から浜松へと転換しました。ゼミでの学びの目的は場所ではなく、フィールドワークを学ぶこと、またその前後の学習であることに全体で合意しました。各ゼミ生の尽力により、限られた時間の中でもフィールドワークを実施しました。浜松ではABC生合同の班に別れてのフィールドワークや、現地で活動している公益財団法人での聴き取り、遠

州浜団地でのフィールドワーク、現地で生活されている日系ブラジル人の方たちとの交流など、非常に有意義な時間を過ごすことができた。後期には期末成果報告会があり、報告会に向けての準備やフィールドワークのまとめ等を行いました。期末成果報告会からの学びも含めて、最終報告書（総頁数 96 頁）をとりまとめました。

C 生は三年間の学びを AB 生に伝えるとともに、卒業後の生活のなかで“フィールドワークの力（自分で道を切り開き、大切なこと／ひとに出会い、ともに場を創る力）”をどのように生かすかについて、言葉として遺す準備をすすめてくれました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・B・C

実施日：2023 年 9 月 1 日(金)～2023 年 9 月 2 日(土)

実施都市：静岡県浜松市

実施場所：浜松市多文化共生センター・他

実施内容：ABC 生合同の班を複数結成し、班ごとに〈テーマとリサーチ・クエスチョン〉を定めてフィールドワークを実施した。

成果：〈あるき・みて・きいて・しらべ・ふりかえり・かんがえ・ともにかく〉を実践することにより、“異質性を含み混んだコミュニティ (composite community with heterogeneity)” の条件についての考察を深めた。

(5) 山田 恭稔 (国際経営学部・教授)

F L P 演習 A・C

<テーマ>

開発社会学を通して東南アジアを捉える

<授業の概要>

開発社会学の視点から、東南アジア地域での貧困や格差に関連する多岐にわたる開発課題あるいは社会問題に対する政策や国際協力について、地域社会を軸に研究する。また、東南アジア諸国が抱える開発課題や社会問題に対する政策および試み、ならびにそれらが地域社会にもたらした影響について学びを深めながら、開発社会学の視点や考え方の基礎を批判的思考を通して習得する。

なお、本演習 A では、輪読を行ないつつ、関心テーマに基づくグループ研究を進め、論文を作成する。本演習 C では、輪読を行なう一方で、修了論文作成のための企画、準備・計画、情報収集、収集情報および結果の取りまとめ、論文執筆に取り組む。

本演習 A・C は、ゼミ生が専門知識だけではなく、発表や討議をも含んだチームワークの経験を積み、協調性、自己管理能力を修得し、また、フィールドワークに基づいたレポートや演習論文の作成などを通じ、総合的な学習体験と知的複眼思考力を修得することに関わる。

<活動内容>

山田ゼミでは、輪読と、グループ研究または修了研究という相互補完的に作用する2つの活動の両輪を並行させながら、ゼミ生たちが主体となった研究活動を進めました。諸事情のために一部学生がオンライン参加することもありましたが、全体としては毎回ほぼ全員が出席する形で対面形式を軸とした授業を進めることができました。このことは、所属学部が異なる A ゼミ生相互のみならず、A ゼミ生と C ゼミ生という学年を超えた親睦と協力が深まることにつながりました。そしてこのことは、積極的な討議や活発な意見交換、チームワークに基づく多岐にわたった有意義なゼミ活動を生み出す礎にもなりました。

輪読では、国際協力や国際開発に関してのみならず、東南アジアの社会や政治に関する文献から学びました。これらは、学術論文、あるいはテキストや専門書の章であり、合計で 14 編を活用し議論を深めました。国際協力・国際開発に関しては、主に開発社会学、参加型開発、社会開発の分野について様々な事例を交えつつ扱い、東南アジアに関連しては、主に開発政策、国民統合、エスニシティ、住民組織、コミュニティ、日本在住の外国籍労働者について理解を深めました。

演習 A のグループ研究では、5 月から試行錯誤を重ねながら研究の枠組み作りに取り組み、その精度を夏休み前までに徐々に上げていきました。A ゼミ生たちは、ラオスの少数民族に焦点を当てた初等教育の中途退学をテーマとしました。10 月にはラオスの初等教育に関連して活動している日本の NGO/NPO の方々に対しオンライン形式でインタビューを実施しました。一方、演習 C では、フィリピン人女性の労働、在日クルド人女性と子供たち、タイ式民主主義に関する3つの修了研究が行なわれました。この内、C ゼミ生2名は、10 月以降、対面およびオンラインでインタビューやアンケート調査を実施し、さらに、11 月の国内実態調査の機会も有効に活用できました。A ゼミ生と C ゼミ生が実施したこれらのインタビューやアンケート調査からは、開発や国際協力の現場に実際に携わったり、実態を深く知る人々からの話や言葉に触れる貴重な機会を得ることができました。

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A・C

実施日：2023 年 11 月 1 日(水)～2023 年 11 月 4 日(土)

実施都市：静岡県浜松市

実施場所：浜松国際交流協会・他

実施内容：浜松国際交流協会および JICA 浜松デスク、NPO フィリピンナガイサ、伯人学校

EAS 浜松校、シズラティーノスでの聞き取り調査。在住/出稼ぎフィリピン人女性の街頭調査。静岡大学国際交流ラウンジとの交流。

成 果：浜松国際交流協会、NPO フィリピンナガイサ、伯人学校 EAS 浜松校、シズラティーノスからの聞き取り調査では、外国籍住民と地域住民が共に地域コミュニティを作っていくために様々な取り組みが行なわれていることがわかりました。具体的には、多言語対応での外国籍住民への情報提供や相談窓口設置やメンタルヘルスケア、日本語教室の開講、防災セミナー、外国籍住民と日本人住民との国際交流イベントの開催などが行なわれていました。一方、街頭調査では、24名のフィリピン人女性から街頭インタビューを主にタガログ語、あるいは英語で行なうことができ、彼女たちの訪日前の背景、現在の置かれている立場、暮らし向き、心境などを知ることができました。

対象演習：A・C

実 施 日：2023 年 11 月 4 日(土)

講 演 者：渡邊 カルロス 氏 (シズラティーノス 代表)

演 題：多文化共生に向けた取り組みと課題

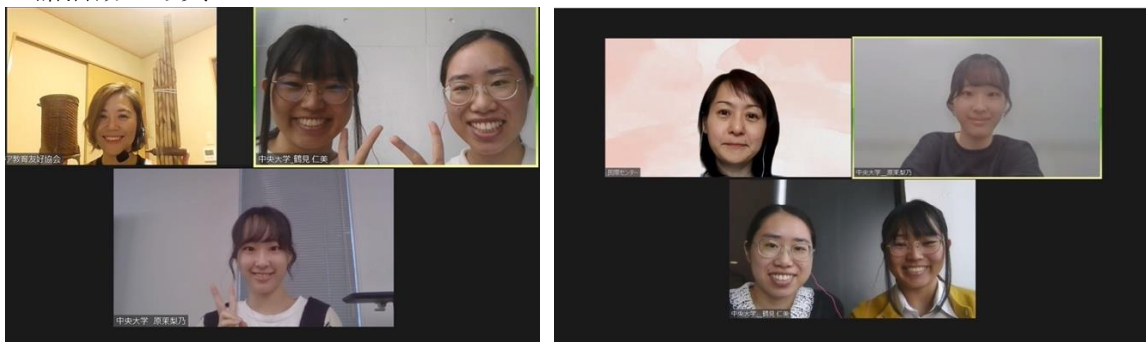
実施都市：静岡県浜松市

実施施設：シズラティーノス オフィス

実施内容：任意団体シズラティーノス (SHIZULATINOS) の多文化共生に向けた様々な取り組みをめぐって、その現状、成果、課題に関する経験談と考察をうかがう。

成 果：シズラティーノスの目的「豊かな多文化共生社会を実現するため」は、代表を務める渡邊カルロス氏をはじめとする、ラテンアメリカから日本に出稼ぎに来た日系人を親に持つ第2世代たちの経験に拠っていました。その活動は、多言語での外国人に役立つ情報発信、日本での生活に役立つ内容の講演会やセミナーの多言語での開催、外国籍住民と日本人住民との国際交流イベントの開催、国際理解教育の実施、外国籍住民への支援など、多岐にわたっています。子供たちの教育の現場では試行錯誤が現在でも続けられているようですが、シズラティーノスのこれらの活動は、第2世代たちの経験や苦労に基づいており、外国籍住民も地域社会の一員として、職場や地域のつながりを築きながら「本当の」多文化共生を深化させるための取り組みとなっていることが理解できました。

<諸活動の写真>



Aゼミ生によるオンラインでの聞き取り調査 (アジア教育友好協会、民際センター)



実態調査での訪問(フィリピンナガイサ、伯人学校 EAS 浜松校)



実態調査での訪問(静岡大学、シズラティーノス)



ゼミ生たちの交流と親睦

(6) 伊藤 晋 (全学連携教育機構・兼任講師)

FLP 演習 C

<テーマ>

国際協力の現実、成果、課題の検証

<授業の概要>

本演習では、国際協力の新たな潮流等を中心に研究しつつ、各自の問題意識に基づき、修了論文を作成します。演習では、具体的な開発プロジェクトの事例研究も行うことで、実践的なアプローチや手法を学ぶとともに、映像教材等を用いて国際協力の実態・課題も検証します。

<活動内容>

2023 年度の伊藤 C ゼミでは、A ゼミ、B ゼミでの成果を踏まえ、個人の修了論文について 1 年間かけ取り組みました。

前期では、テーマ、リサーチクエスション、研究計画書について、ゼミ内で発表し、相互にコメントし合うことで、改善を図りました。また主要文献についても、ゼミで発表し、議論することで、他のテーマに関する知識や分析手法等についても理解を深めました。

夏季休暇中には、フィリピンにおける実態調査を実施するとともに、国内外における、政府機関、NGO、研究者等との面談、メールによる照会等を実施しました。

後期には、論文の構成を固め、追加的な文献研究と国内外の関連団体・企業等とのオンライン面談等を継続し、12 月には国際協力プログラムの期末成果報告会で発表するとともに、論文を作成しました。

最終的な論文のタイトルは、以下のとおりです。

「日本の鉄道インフラの海外展開に今後求められること」

「ルワンダの経済発展について」

「フィリピンの一村一品運動と日本企業の関わり方」

「スマホやパソコンによる水防災情報提供と住民との合意形成に向けたマニラ流域水マップの開発」

「非集住地域で暮らすフィリピンルーツのともたちはいかなる困難を抱えアイデンティティを形成しているのか」

「フィリピンにおける地方分権化～バランガイに焦点を当てて～」

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：C

実施日：2023 年 8 月 21 日(月)～2023 年 8 月 26 日(土)

実施都市：マニラ (フィリピン)

実施内容：個人論文のテーマに関連する、以下のフィリピン政府機関、日本政府機関等に訪問の上、インタビューを実施するとともに、関連情報を収集するため、以下を訪問見学した。

インタビュー実施機関：

フィリピン運輸省、地方自治省、フィリピン貿易産業省、フィリピン気象庁、フィリピン日本商工会議所、日本大使館、JICA フィリピン事務所等

訪問見学場所：

San Juan River 周辺、Pasig-Marikina River 周辺、バランガイホール等バランガイ関連施設、LRT 1 号線、同 2 号線、MRT3 号線 (電車) 等

成 果：個人論文について、前期における文献調査、先行研究等により収集した情報等に基づき、フィリピンにおける関連機関を訪問の上、疑問点等についてインタ

ビューを行うことで、課題の深刻さについて改めて認識するとともに、取組み等に関する最新の状況等について知見を深めることが出来た。



フィリピン貿易産業省にて



フィリピン気象庁にて

(7) 小澤 勝彦 (全学連携教育機構・客員教授)

FLP 演習 B ※前期は演習 C と合同開催

＜テーマ＞ 国際協力から見える現代の世界・日本の課題

＜授業の概要＞

国際協力論は経済、政治、社会等をカバーする総合的・学際的分野であることは勿論、環境問題、貧困問題等極めて広い範囲を扱う点で、日本にいる我々にも身近な問題と密接な関係があります。本ゼミでは、演習 A で実施した国際協力の歴史・課題及び人類にとって開発が何を意味するかを哲学や開発思潮にまで遡って学習した内容を受け、現代の世界・日本にとって重要なテーマを幾つか取り上げて関連する時事トピックスなどを題材として議論し、解決策等を検討しました。そのためにゼミ生は主体的に課題の設定、分析、発表を実践しました。

＜活動内容＞

当ゼミは ODA (Official Development Assistance) と SDGs (Sustainable Development Goals) を二本の柱としています。ODA に関しては、講義を中心に基礎事項を学習し、SDGs に関しては、新聞・雑誌等の最新の記事を活用しゼミ内プレゼンテーション及び議論をおこない、参加型でゼミを運営しました。ゼミ生は途上国の貧困問題の現場を実地で経験することで開発の課題を勉強することを目的に夏季休暇期間を活用してタイにおいて首都圏及び地方部を訪問して貧困層の教育の現場等を調査し、その成果を期末成果報告会において発表しました。また、発表を論文の形で取りまとめ演習 B での集大成としました。

当ゼミでは過去から現在に至る開発問題と現代の世界の諸問題及び国内の身近で起こっている課題を一体として理解することを目標にしています。この趣旨に従い、ゼミ生は多くの課題に取り組みました。例えば、自由主義経済世界での副作用としての格差拡大、人権問題、地球環境問題、そしてそうした状況下改めて考え直す必要性が高まっている社会福祉、教育問題などに取り組みました。

①講義

ゼミ生は、演習 A において開発が人類の歴史の中でなぜ 20 世紀半ばになって重要なテーマとして登場してきたのか、そして南北問題が国連等の場で主要な課題になってきたのか、更にそもそも人類の歴史の中で貧困、格差、ジェンダーといった問題がどのようにして生まれてきたのかを産業革命から植民地支配に至る歴史を振り返ることによって学習しました。演習 B ではこれらの開発論の議論を深め途上国の開発・経済成長に内在する経済停滞問題を学習しました。こうした国際協力の理論、歴史、様々な取組が現在の SDGs の底流にあることをベースに現在の世界、日本社会で起きている貧富の格差、地球環境問題、ジェンダー、人種差別などの課題を題材としてゼミの中での議論につなげることで、参加型の運営をおこないました。

②レポート作成・ゼミ内プレゼンテーション

講義と並行して、国際協力や社会問題に関する新聞や雑誌の記事、ビデオ教材を提供又はゼミ生自身が提示し、それらに関する分析、解釈及び解決に向けた提案等をゼミ内でプレゼンテーションし、様々な角度から議論をおこないました。

(ゼミ内議論等のテーマ)

タイにおける水害と経済格差/タイ人権報告書を読んで/トー横界限と第三の居場所/ヤングケアラー/日本とアメリカにおける銃規制/タイ治安部隊人権侵害問題/アメリカ・日本の大学入試制度と就職活動/タイにおける出稼ぎ/お金と幸福度の関係性について/米国企業におけるアフーマティブ・アクションの導入/女性の子育てと正規雇用での就業の両立を阻む要因/介護離職について/日本における原子力発電所の処理水の海洋放出とそれに伴う中国の

対応について/これからの国際理解教育/日本のドローン産業

プレゼン/議論指導のポイント：

SDGs や環境などに関する包括的な認識を深めるとともに、ゼミ生の関心の高い教育、貧困、人権などについて問題の背景には個別の問題だけでなく共通の社会問題が底流にあることを理解することの必要性を学びました。そして、様々な国際問題、社会問題について自らの問題として考える習慣をつけてもらいました。

＜海外現地調査＞

調査研究名：「タイの地域格差と農村部における教育の課題」

実施日：2023年8月3日（木）～8月9日（水）

実施都市：バンコク、チェンライ（タイ）

実施施設：JICA タイ事務所、さくらプロジェクト（NGO）、メーファールアン大学

実施内容：事前に文献、WEB を活用してタイの社会、貧困の現状を調べるとともに JICA 事務所を通じ主に教育分野で活動を実施中の青年海外協力隊員のリモート・ヒアリングを実施した。現地では各訪問先でタイの教育分野の状況についてブリーフを受けた。その上で、それぞれの機関の取組について説明を受け議論した。特に、少数民族を対象とする教育支援を行っている NGO「さくらプロジェクト」では寄宿舎で学ぶ児童を直接取材することで地方部の少数民族の初中等教育の問題点の一端を知ることができた。

成果：ゼミ生は「タイの地域格差と農村部における教育の課題」について共同で期末成果報告会で発表するとともに論文にまとめた。

調査研究指導のポイント：

テーマ設定、調査の手法等ゼミ生の自主性に任せつつ、期末成果報告会の資料等の論理性、分析手法などについて重要なステージで指導をおこなった。

FLP 演習 C ※前期は演習 B と合同開催

<テーマ>

国際協力から見える現代の世界・日本の課題

<授業の概要>

国際協力論は経済、政治、社会等をカバーする総合的・学際的分野であることは勿論、環境問題、貧困問題等極めて広い範囲を扱う点で、日本にいる我々にも身近な問題と密接な関係があります。本ゼミでは、演習 A、B で実施した国際協力の歴史・課題、人類にとって開発が何を意味するかを哲学や開発思潮にまで遡って学習した内容を受け、開発経済学のテキスト『開発経済学入門』を使い、特に経済成長論の理論的なバックグラウンドを学びました。また、国際協力や SDGs に関連する時事トピックスなどを題材として議論、解決策等を検討しました。ゼミ生は 主体的に課題の設定、分析、発表をおこないました。

<活動内容>

当ゼミは ODA (Official Development Assistance) と SDGs (Sustainable Development Goals) を二本の柱としています。ODA に関しては、講義を中心に基礎事項を学習し、SDGs に関しては、新聞・雑誌等の最新の記事を活用しゼミ内プレゼンテーション及び議論をおこない、参加型でゼミを運営しました。ゼミ生は開発途上国だけでなく先進国でも国の開発及び社会経済の発展と大きなかかわりを持つジェンダー問題について世界の状況と日本の課題を調査研究し、その成果を FLP 期末成果報告会において発表しました。また、発表を論文の形で取りまとめ演習 C での集大成としました。当ゼミでは過去から現在に至る開発問題とウクライナ戦争やコロナ・パンデミックなど現代の世界の諸問題及び国内の身近で起こっている課題を一体として理解することを目標にしています。この趣旨に従い、ゼミ生は期末成果報告会で発表したジェンダー問題だけでなくボーダレスの世界での格差拡大、人権問題、地球環境問題、そしてそうした状況下改めて考え直す必要性が高まっている社会福祉、教育問題などに取り組みました。

①講義

ゼミ生は、演習 A、B において開発が人類の歴史の中でなぜ 20 世紀半ばになって重要なテーマとして登場してきたのか、そして南北問題が国連等の場で主要な課題になってきたのか、更にそもそも人類の歴史の中で貧困、格差、ジェンダーといった問題がどのようにして生まれてきたのかを産業革命から植民地支配に至る歴史を振り返ることによって学習しました。

演習 C ではこれらの開発論の議論を深め途上国の開発・経済成長に内在する経済停滞問題（貧困国・中進国の成長の罣）などを開発経済学のテキストを使って議論することで理解を深めました。こうした国際協力の理論、歴史、様々な取組が現在の SDGs の底流にあることをベースに現在の世界、日本社会で起きている貧富の格差、地球環境問題、ジェンダー、人種差別などの課題を題材としてゼミの中での議論につなげることで、参加型の運営をおこないました。

②レポート作成・ゼミ内プレゼンテーション

講義と並行して、国際協力や社会問題に関する新聞や雑誌の記事、ビデオ教材を提供又はゼミ生自身が提示し、それらに関する分析、解釈及び解決に向けた提案等をゼミ内でプレゼンテーションし、様々な角度から議論をおこないました。

(ゼミ内議論等の主なテーマ)

中国の少子高齢化と経済成長/日本の子供の貧困における法律と現状/フランスのパリテ論争/アフーマティブ・アクションと時間的制約/女性活躍推進と経営効果/日本企業の障害者雇用施策

プレゼン/議論指導のポイント：

SDGs や環境などに関する包括的な認識を深めるとともに、ゼミ生の関心の高い教育、人権、環境、ジェンダーなどについてその背景を学習しました。様々な国際問題、社会問題について自らの問題として考える習慣をつけるように留意しました。

③論文作成（FLP 期末成果報告会発表）

「日本におけるアフーマティブ・アクション導入の考察」についてゼミ生は期末成果報告会で発表するとともに論文にまとめました。

ゼミ生は日本のジェンダーギャップ指数が世界の中で極めて低位にあることに問題意識をもち、世界でのジェンダー問題への取り組みの歴史等を踏まえ日本の現状をアフーマティブ・アクションの導入を軸に調査研究しました。アフーマティブ・アクションが直接企業経営や経済に強い影響を与えるか否かについてはエビデンスベースで証明することは困難ですが、ジェンダー平等など弱者の社会における共同参画を推進することにより女性、在日外国人、障害者等難しい環境にある人々が様々な分野で対等な立場で義務と権利を共有する社会を実現することの重要性を学ぶことができました。

論文指導のポイント：

テーマ設定、調査の手法等ゼミ生の自主性に任せつつ、成果発表の論理性、分析手法などについて重要なステージで論文の方向性について指導をおこなった。

(8) 花谷 厚 (全学連携教育機構・客員教授)

F L P 演習 A

<テーマ>

国際協力における開発と社会一人々の暮らしと開発介入

<授業の概要>

国際協力は、開発途上国社会を対象として、一人当たりの所得向上や識字率向上、保健・衛生状態の改善等、特定の効果・目的を意図して実施されますが（開発介入）、その過程で必ずと言っていいほど、受入社会にさまざまな社会的影響を生みます。

開発介入の持続性を確保するためには、社会的影響をそこに住む住民の視点から理解し、住民に受け入れられる形・方法で協力するとともに、導入された活動・施設・制度が、当該地域住民と社会による自助・互助・共助や公助（公的支援・規制）により支えられている必要があります。しかし、実際にはこれらの社会的影響を理解・把握し、社会のシステムとして様々な「助」を定着させることは容易ではありません。

本演習では、国際協力および国内の社会開発（コミュニティ開発）の場を事例として、外部からの開発介入をそれを受け入れる人々の視点から捉え直し、社会的に持続可能な開発のあり方とはどのようなものかについて一緒に考えていきます。

<活動内容>

当ゼミは、前後期通じて4名で実施した（開講日時：水曜日6時限）。

前期においては、国際協力に関する概論講義から始め、開発協力プロジェクトの計画・評価手法を学習した上で、前期後半には開発介入に伴う外部者と受入れ社会との間にどのような関係が生まれるのかについて、参加型開発分野の書籍、論文の輪読を行った。

前期各回における具体的な演習内容は以下のとおり。

1. オリエンテーション
2. 国際協力の今日的意義（国際協力を巡る基礎用語解説）
3. 開発と貧困1（開発と貧困を巡る様々な概念の定義と測定方法）
4. 開発と貧困2（貧困と格差の問題、国際開発論概念について詳説）
5. 国際協力の実施体制（日本を中心に国際機関、他二国間援助実施体制について講義）
6. プロジェクトの計画・評価手法1（プロジェクト・サイクル・マネジメント手法概論）
7. プロジェクトの計画・評価手法2（上記に基づく議論）
8. 開発介入と社会にかかる事例研究1（「続入門社会開発」ケーススタディ1 輪読と議論）
9. 開発介入と社会にかかる事例研究2（「続入門社会開発」ケーススタディ2 輪読と議論）
10. 開発介入と社会にかかる事例研究3（「続入門社会開発」第3章～第5章輪読と議論）
11. 開発介入と社会にかかる事例研究4（「続入門社会開発」第6章～第7章輪読と議論）
12. 藤山一郎「外部者の役割をめぐる『コミュニティデザイン』と『参加型開発』の比較研究」輪読と議論
13. 開発介入における外部者の役割と受益者の関係についての議論
14. 前期講義振り返り

夏季休暇中課題図書：「ストーリーで学ぶ開発経済学」

後期においては、課題図書の要旨発表・議論から始め、その後、昨年に続き埼玉県秩父郡横瀬町への現地見学調査を実施した。右を踏まえて、期末成果発表会に向けて準備を行うとともに期末成果報告書を提出した。

後期各回における具体的演習内容は以下のとおり。

1. 後期オリエンテーション
2. 課題図書輪読 1（第 1 章）
3. 課題図書輪読 2（第 2 章）
4. 現地見学調査準備 1（横瀬町概要ブリーフィング）
5. 現地見学調査準備 2（事前調査発表）
6. 現地見学調査準備 3（事前調査発表）
7. 現地見学調査準備（調査行程、質問内容検討）
（現地見学調査実施）
8. 現地見学調査振り返り
9. 期末成果報告会準備 1（発表内容検討 1）
10. 期末成果報告会準備 2（発表内容検討 2）
11. 期末成果報告会準備 3（スライド案発表と議論）
12. 期末成果報告会準備 4（発表内容最終化）
13. 期末成果報告書作成 1（執筆担当分け）、課題図書輪読 3（第 3 章，第 4 章）
14. 「日本の近代化経験と開発援助」に関する講義

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：A

実施日：2023 年 11 月 2 日（木）

実施都市：埼玉県秩父郡

実施場所：横瀬町役場・他

実施内容：横瀬町まち経営課、エリア 898 等町内施設を訪問し、地域おこし協力隊員にインタビューを実施した。町内のまち歩きを行い、参加型手法におけるトランセクト手法による地域理解を試みた。

成果：見学調査結果を踏まえ期末成果報告会発表・期末成果報告書作成につなげることができた。

<成果>

最終的に、期末成果報告会・報告書は以下のテーマで作成・提出することができた。

「国内の地域開発と国際協力の地域開発の比較と相互学習の可能性」

執筆者：萩原萌衣、奥津ひなた、高山葵衣、濱田多恵（計 4 名）

FLP演習B・C

<テーマ>

国際協力における開発と社会一人々の暮らしと開発介入

<授業の概要>

国際協力は、開発途上国社会を対象として、一人当たりの所得向上や識字率向上、保健・衛生状態の改善等、特定の効果・目的を意図して実施されますが（開発介入）、その過程で必ずと言っていいほど、受入社会にさまざまな社会的影響を生みます。

開発介入の持続性を確保するためには、社会的影響をそこに住む住民の視点から理解し、住民に受け入れられる形・方法で協力するとともに、導入された活動・施設・制度が、当該地域住民と社会による自助・互助・共助や公助（公的支援・規制）により支えられている必要があります。しかし、実際にはこれらの社会的影響を理解・把握し、社会のシステムとして様々な「助」を定着させることは容易ではありません。

本演習では、国際協力および国内の社会開発（コミュニティ開発）の場を事例として、外部からの開発介入をそれを受け入れる人々の視点から捉え直し、社会的に持続可能な開発のあり方とはどのようなものかについて一緒に考えていきます。

<活動内容>

当ゼミは、前後期を通してBゼミ10名、Cゼミ5名、計15名で実施した（開講日時：水曜日5時限）。

前期においては、社会科学的な研究手法を学ぶためのテキストとして『新・社会調査へのアプローチ』（大谷信介他編著、ミネルヴァ書房、2013年）を輪読し、各自レポートにまとめた。引き続き、海外実態調査が行われることを前提に、カンボジアを対象とした事前学習、調査行程作成、質問票作成等を行った。

前期各回における具体的な演習内容は以下のとおり。

1. オリエンテーション
2. 「新・社会調査へのアプローチ」の読后感想発表・議論
3. 海外実態調査対象国選定、準備スケジュール作成
4. 海外実態調査準備1（事前学習1：カンボジアの地理）
5. 海外実態調査準備2（事前学習2：カンボジアの歴史）
6. 海外実態調査準備3（事前学習3：カンボジアの政治）
7. 海外実態調査準備4（事前学習4：カンボジアの経済）
8. 海外実態調査準備5（事前学習5：カンボジアの教育と保健）
9. 各自研究テーマ発表と議論1
10. 各自研究テーマ発表と議論2
11. 各自研究テーマ発表と議論3
12. 各自研究テーマ発表と議論4
13. 各自研究テーマ発表と議論5
14. 前期振り返り

夏季休暇期間においては、引き続き海外実態調査に向けた準備を行った。実際の調査は9月3日から10日の7泊8日で行った。なお、参加ゼミ生はBゼミ生7名、引率1名である。参加しなかった学生も各自の研究テーマに沿って学習、研究を進めた。

後期は、夏季休暇期間中の海外実態調査、学習を踏まえ、期末成果発表会に向けて準備を行うとともに期末成果報告書を提出した。

後期各回における具体的な演習内容は以下のとおり。

1. 後期オリエンテーション、海外実態調査振り返り
2. 期末成果報告会準備 1 (報告内容構想発表 1)
3. 期末成果報告会準備 2 (報告内容構想発表 2)
4. 期末成果報告会準備 3 (報告内容構想発表 3)
5. 期末成果報告会準備 4 (報告内容構想発表 4)
6. 期末成果報告会準備 5 (報告内容構想発表 5)
7. 期末成果報告会準備 6 (報告内容構想発表 6)
8. 期末成果報告会準備 7 (報告内容構想発表 7)
9. 期末成果報告会準備 8 (発表内容最終調整 1)
10. 期末成果報告会準備 9 (発表内容最終調整 2)
11. 期末成果報告会振り返り
12. 期末成果報告書作成 1
13. 期末成果報告書作成 2
14. 「日本の近代化経験と開発援助」に関する講義

<実態調査・見学調査・講演会>

対象演習：B

実施日：2023年9月3日(日)～9月10日(日)

実施都市：プノンペン市、シェムリアップ市(カンボジア王国)

実施場所：JICA 事務所、JICA プロジェクト・他

実施内容：JICA 関係者、各団体関係者へのインタビュー、意見交換

成果：調査結果を踏まえ期末成果報告会発表・期末成果報告書作成につなげることができた。

<成果>

最終的に、期末成果報告書はB・Cゼミ合わせて以下の8本の報告書の形で作成・提出することができた。

- 寺田純菜・小林多治生・小俣俊平 (Bゼミ)
「2023年カンボジア総選挙について」
- 南方将喜・梶杜英太・小石川隼 (Bゼミ)
「カンボジアにおける観光事業 ～日本の事例を交えて～」
- 立野莉子 (Bゼミ)
「カンボジアにおける英語教育の発展とその弊害について」
- 足立優海 (Bゼミ)
「カンボジアにおける生徒の学力と教師一人当たりの生徒数の関係性について」
- 清水萌果 (Cゼミ)・山下怜夏 (Bゼミ)
「カンボジアの教育分野における逆ジェンダーギャップについて」
- 久保田優果 (Cゼミ)・富士原早紀 (Bゼミ)
「カンボジアにおける私塾の流行とその影響」
- 井上美雨 (Cゼミ)
「カンボジアにおける不就学児の近年の傾向について」
- 野本穰・中尾玲奈 (Cゼミ)
「日本の兼業実施率上昇に向けた課題の再検討～企業調査結果より～」